え？異世界？……あぁ、そう。興味無いね（仮）

一ノ木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
え？異世界？……あぁ、そう。興味無いね（仮）

【Ｎコード】
Ｎ０００７Ｘ

【作者名】
一ノ木

【あらすじ】
色々あって、色々ありすぎた元の世界で、結婚相手の女性をかばい死亡。ある意味男の栄誉だが、だが？　根暗で冷めた少年、カゲロウが行く自由気ままな脱力系ファンタジー。※初投稿なので、稚拙な文ですが宜しくお願いします。ＰＶ８０万突破ありがとうございます。お気に入り二五〇〇件キター（°∀°）――！！……恐ろしや。分不相応な気がして止まない……。

登場人物とか設定資料とか（前書き）

とりあえず登場人物とか設定資料とかを晒します。

登場人物とか設定資料とか

カゲロウ＝ヴィオーネ

【性格】
若干根暗で若干冷めている。それなりの正義感は持ち合わせている。向上心も人一倍強い。

【備考】
転生者。

【魔法】
『曲弦師』：半径三キロ圏内。一本の張力は一〇〇キロ。最高本数四万本。糸の状態を変質させることができる。

『身体強化』：ポピュラーな魔法。体の各部位に魔力を纏わせ、無理な駆動による反動を軽減させたり、力を上乗せしたりして人体の限界を超える。倍率は個人の才能にも依る。

キーナ＝ヴィオーネ

【性格】
エロい。とにかくエロい。エロさの中に潜むエロさがこれまたエロいお姉さん。カゲロウからするとちょっと行きすぎた愛情に見えるらしい。

【備考】

『最悪の魔女』。カゲロウの育ての親。過去に魔術国家フレメアから死刑宣告ともとれる国外追放を受けた経歴を持つ。その時の渾名が『無敵要塞』。戦力的には古代魔法や失われた魔法以上。

【魔法】

『身体強化』：上記を参考

『???』：デラリオドラゴンといった中位の竜種を軽く粉砕できる程度の魔法を各種使える。

『広域殲滅系魔法』：半径五キロに上級魔法や古代魔法を降らせる禁忌魔法。これで当時の恋人を灰にした。

プロローグ（前書き）

目指せお気に入り１００件！！　目指せ完結っ！

ではどうぞ。

プロローグ

……僕の人生とはなんだったのだろうか。

幼稚園のころから、親の品格とやらの為に僕という存在は使い潰され始めた。

父は政治家。母は大手コンサルタント経営の女社長。どこをどう取っても非の打ちどころがない両親の間に、僕という生命は誕生した。

幼稚園のころから、帰ってきても二人はいなくて、一カ月に一度視線を交わすことすら難しかった。一緒に食事をするときは跡取りのお披露目立食パーティーのときだけ。それでも二人は要人たちとの腹黒いやり取りを交わしているだけ。

勉強も物心がつく前からやらされていた気がする。

厳しい家庭教師がついて、食事と睡眠の時以外はシャープペンシルを握っていた。

世の中の目を気にしないと碌に口を出すことすらできない友人関係。そんな友だちも大体は僕と似たような感じで、一生懸命魂をすり減らしていた。

小学生ともなるとさらに激しくなる。

運動能力さえも求めてきた両親。それに反抗できない僕。過労で倒れそうになりながら、それでも僕が頑張り続けられたのは両親と――。

出来れば、褒めてくれる、期待してくれる。それだけが、唯一無二の支えだったのかもしれない。

そのころからか。命を狙われ始めたのは。
父も母も力を持ちすぎた。脅迫まがいの文面が一日に数十件送られてくるなんて当たり前すぎて欠伸が出る。武力行使で襲われるときもあった。
しかし、二人についているガードの層は、それこそ核シェルターに潜り込まれるより厄介なもので、その尽くが失敗に終わった。

そんな中、二人よりもほんの少しガードの薄い僕が狙われるのは当たり前のことか。
額にレーザーポインタが照準されることもあった。ダイナマイトを腹に巻いて襲ってくる奴もいた。機関銃を乱射してくる奴もいた。食事に毒薬を混ぜる奴もいた。

しかし、それらから僕を庇って死んでいく周りの人たち。
そのどれもが、僕を庇わなかったら死ぬ必要がなかった人たちで、死ぬ直前は僕の瞳を見つめて笑いながら死んでいった。本当に、暖かな瞳だった。
そのことが、逆に僕を苦しめた。気持ちがいいぐらいに罵ってくれる方が、こちらとしては気が楽だった。それこそ、曲がりなりにも小さなころから一緒にいる人たちばっかりだったから。

そんな中、古参のもので最後に残ったのは霧島霞という女性だった。
僕の教育係兼気を許せるお友達、という役割を与えられているというのを随分昔に聞いていた。
だけど、そんなこと気にせず、笑って僕と遊んだりしてくれた。
僕より、たった五歳年上の女性だった。

いつも、笑顔でいてくれたんだ。

恥ずかしながら、初恋の相手が五歳年上の女性だったのは言うまでもないだろう。

そして、中学生。

死ぬことは無い大丈夫絶対に生き伸びれる心配することはないこの世界は都合と不都合しかない二人で生きていける結婚しよう。

死んだ。霧島霞という二十歳の若くて儚く美しい命は、僕を庇って死んだ。

僕が、『十八歳になったら、結婚してください』と言って、『うれしいです』と言ってくれた一時間後だった。

その日は、スナイパーライフルでもなく、ＡＫ４７などのフルオートのライフルでもなく、パーティー会場にいる者全員を吹き飛ばすダイナマイトでもなく、何の気なしに食べた鯛のカルパッチョに入っているかもしれない毒薬でもなかった。

ナイフ。金属探知機も導入されたパーテイー会場に、ただ単純に動物の骨をナイフの形に削ったものに毒薬を塗りこんだものだった。

ザグザグと。

肉を、血を、内臓を。それらが飛び散ると共に、霞の命も、飛び散っていった。

『……生きて、ください。かげ、ろ、うさ、ま』

『か、霞、霞ッ！！』

『……愛して、ます』

『――――ッ！！！！』

最初、僕が彼女に覆いかぶさって守ろうとした。けど、彼女はにっこり笑って『どいて、ください』と、僕を跳ねのけた。

彼女が滅多刺しにされるのを、僕は、僕は、僕は、眺めていることしかできなかった。

五歳の年の差はあった。だけど、たしかに、確かに愛していたのに。

冷たくなっていく彼女の体を、必死に抱きしめた。ただ、ごめんなさいとありがとうと愛してる、の三つしか言えなかった。

かくして、彼女はどこかにあるような小説の悲劇のヒロインのように、僕の腕の中で死んでいった。たとえ小説ではありふれていたとしても、登場人物としては最悪の形で。

僕が、十五歳の時だった。

それでも、僕は努力を諦めはしなかった。もう、それしか、僕には残ってはいなかったから。それを失うのが怖かった。

それを諦めてしまえば、霞のことも無駄になってしまうから。

諦めない諦

めない諦めない諦めない諦めない諦めない……――――諦めない。

数えるのは、一万で止めた。

高校生になったとき、何度目になるか分からない立食パーティーに参加した。中世ヨーロッパ王侯貴族さながらの政略結婚のように、適当な結婚相手を探すためでもあった。

僕の両親は、母は経済面に、父は政治面に言うまでも無く根を張っている。

僕もやがてはどちらかの、もしかしたらどちらの跡も継ぐのだろう。

これは、顔見せであったのかもしれない。

「蜉蝣さん、大丈夫ですか？　ご放心なされて」

「……ええ、大丈夫です」

「それにしても綺麗な黒髪ですわ。まるで鴉の濡れ羽のよう……、瞳も黒真珠のようで……。ふふ。女としては少しばかり嫉妬しますわ」

「ご冗談を。咲夜さんのようなお綺麗な方に言われると本気にしてしまいそうで怖いです」

「ふふ。まあ。口のお上手な方♪」

僕の容姿はなんていうか、他人から見ると美人系男子に映るらしい。

黒髪黒目で、アルビノのような白い肌（と言ってもアルビノでは

ない）、身長は一八〇ぐらいだろうか。よく覚えてない。興味がないし。

自分で見たら気持ち悪い以外感想なんて浮かばなかった。それでも、霞にも褒められたことがあるので満更でもないという複雑な気持ちだった。

でも、目の前のこの女性が見ているのは僕じゃない。

バックにある金と権力だ。

そんなモンだ。金と政治が絡んでくる世界なんて、容姿なんてどうでもいいし（少しだけ求心力が上がるけど）、良心なんて二の次だ。テレビに映る政治家が騙る日本の理想像なんて、聞いただけでも寒気が出る。それを悪いとは言わないけど。

僕のことを正面から見てくれたのは、霞だけだった。

……ダメだな、依存してる。

そういう裏の状況を見なければ、まだこの女性はマシ、いや最高と言えるだろう。

最初に僕のことについて話しかけてくれる人は霞が死んで以来だった。それ以外は『あなたのお父様は』『あなたのお母様は』から始まる、ようするに完全に僕を見てない金と権力の亡者どもだった。

うん。いいかもしれない。たしか、お父さんが作った結婚相手リストの最下位の人だった気がするけど（金と権力がリストの中で断トツで最下位という意味。逆に好ましい）、別にいいだろ。一生一緒にいるわけだし、途中で破局してしまったらそれまでだ。

「咲夜さん。今度一緒にお食事でもどうですか？」

「まあ！　本当ですか？　ありがたくお受けいたします♪」

周囲の視線が一気に集まる。「まさかあのような」とか「馬鹿な」とか、反応は大体一緒なのでどうでもいい。興味無い。

「こちらこそありがとうございます。このようなことをするのは慣れていなくて、顔から火が出そうでしたよ」

「ふふ。本当、口がお上手な方」

笑いあう。久しぶりに、人に笑いが零れた。嘲り以外で。

けど、神様は僕の幸せが嫌いらしい。

かちゃり、と。

テーブルの銀のトレイに置かれていた肉切り分け用のナイフが手に取られる音がする。それ自体は別に珍しいことではないし、誰も気にしなかった。

だけど、違和感を覚えた。

かちゃかちゃ、という音がしない。肉を切り分けるつもりなら絶対に聞こえる音だし、聞こえなければいけない音だった。

周りは、その違和感には気づかない。どいつもこいつも、こういう世界に居ながらたるみきった奴らだな、とか思いながら、僕は咲夜さんを抱きしめて覆いかぶさった。別に、発情したサルになったわけではない。

ずぶぶ、と。僕の肋骨の隙間に割って入りこむような、そんな音がする。

反射的に、それをやった奴に振り向きざまに肘を打ち込み、体勢を崩したところに鳩尾に一直線の蹴りを見舞う。三メートルは飛んだだろうか。伊達に体は鍛えていない。

犯行は、僕と咲夜さんの話を聞いて気が動転した結婚相手リスト断トツナンバーワンの女性の父親だった。

これは、肺がやばいかな。大動脈も傷つけられてるっぽい。息がしにくい。僕の体が酸素の供給を出来なくなるのも、対して時間はかからないだろう。

「かげろう、さん？」

「蜉蝣ォオォオオオオオオオ！！」

「蜉蝣さんッ！！」

ずっと遠方から、僕の両親の声がする。あんなに叫んだ両親を、見たのも聞いたのも初めてだ。夫婦喧嘩をしたところを見たことがないおしどり夫婦だったから。

僕の背中には、銀のナイフが突き立っている状態。黒い礼服もやがて血が滲んできてぐしゃぐしゃになる。

足に、力が入らなくなってくる。指先はどんどん冷たくなってくる。頭に回る酸素は最小限のものしかない。

僕は、この感覚を知っている。

死だ。

「蜉蝣、蜉蝣ッ！？」

「蜉蝣さん、しっかりしてッ！！」

僕は両親に抱きかかえられる。

そういえば、僕は両親に聞きたいことがあった。うん、すっごく重要だ。聞こうと思えば聞けると思って、それでもなんだか聞くのが怖くて、胸の内にしまっておいた重要なことだ。

「おと、うさん、お、かあさん……ぼく、のこと、愛して、ましたか？」

「愛している！！　こんな生活を送らせてすまないと思っている！！　だから、お父さんたちに謝らせる時間をくれ！！　こんな、こんなところで死ぬんじゃない！！」

「お母さんも愛してる！！　だから、だからッ！！　蜉蝣、蜉蝣ッ！！！！」

僕は、ゆっくりと煌びやかな天井に目を移した。

なんだ、案外、いい世界じゃないか、と。

僕は二人にありがとうと伝えると、固まっている咲夜さんに目を向ける。

「さくや、さん」

「かげ、ろうさん」

ぷるぷると震える。
僕の震えは血を大量に失ったことによるショック症状だろうけど、彼女のは、なんだろうか？
いきなり横から奪われたことによる怒りか、地位の権力と名声が約束されかけていたところから凋落した悲しみか。

「……さくやちゃん、泣き虫」

「……かげろうくん、ダメよ」

これだけで、十分だった。

世間の目を気にすることなく会話した、友だち同士としての、初めての会話。

連続する理不尽。
それが連綿と繰り返される世界。
絡み合う不幸。
金と権力に溺れた亡者。
疲れ切った魂。
涙が枯れた瞳。
口から溢れる嗚咽。
震える肩を抱きしめられない震える僕。
消えゆく命と、
薄れゆく意識。
存在する世界と、
消失した世界。

僕は、ゆっくりと、目を閉じた。

あながち、人間って、捨てたもんじゃあない。

◆◆◆

ある森、『最悪の魔女』が住むという魔素の濃い森に、一人の赤子が捨てられた。別にそれ自体は珍しいことではない。長く続く戦乱とそれに伴う貧困が全ての原因だった。全ては世界にあるというのは簡単だが、それを乗り越えて育てる者もいる。
複雑と単純の共存こそが世界の大前提だった。

「ごめん、ごめんね。ごめんなさい、ごめんなさい」

「……、」

それを、泣き声一つ上げずに見つめる赤子。
そのまま女性は、涙を流しながらその場を去った。

そんな赤子に近づく、一つの影。服装は黒い外套に黒いとんがり帽子。持っている杖の先端はぐるぐると渦巻いていて、誰もが思い浮かべる魔女という存在の相違ないだろう。
とんがり帽子から出ている髪の毛は毒々しい紫色で、目深に被っているわけでもないので見えている目もアメジストのように紫色。

「うん？　あたしの森に捨て子が。ふむふむ。聡明な子と見えるわね」

何だか値踏みするように木のくぼみに収められている赤子をぐるぐるとあちらこちらから見る魔女。

興味があるなら抱きとればいいものだが、それをしないのは人間になにかしらの敵疑心があるからか。このような赤子にさえこんなことをする魔女だ。

「……、」

しかし赤子はそれすらも黙って見る。まるで既に目が見えているかのように、まるで自我が生まれているかのように。

「ん～？　もしかして、もしかすると、もしかしちゃって？　すでに自我が芽生えてる？　ふうん。よし決めた！」

魔女は両の掌を、パンッ！　と打ち合わせると一世一代の決意をしたかのように宣言する。

「最初はいい魔法の材料が手に入ったと思ったけど……」

若干恐ろしいことを言い放つ魔女に対して、まるで興味がありませんよと言わんばかりの目ではしゃぐ魔女を見る赤子。

「決めたわ！　あなた、今からあたしの子供兼弟子ねっ！！」

それから『最悪の魔女』は、不器用に不慣れに恐る恐る赤子の体

を抱きとると自分の拠点へと連れ帰った。

赤子の方はというと、こうだ。彼女が思っているように、赤子には自我が芽生えている。

そして、そんな赤子がなにを思っているかというと。

（え？　異世界？　……あぁ、そう。興味無いね）

これは若干根暗で若干冷めた少年の、ありきたりな世界でのありきたりな物語。

それをどうやって生きるのかは、どういった物語にするのかは、彼の自由である。

プロローグ（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第一話：転生とか

「どうしたの？　カゲロウくん。柄にもなくぼーっとしちゃって」

「えと。ぼーっとしてたの？」

「うん。その黒真珠のような瞳を遥か彼方、もしかしたら天国に向けてた。ダメだよー練習中はそういうの。うっかり死んでも誰にも文句言えないよ？」

今、森の中では異様に開けた場所で一組の男女が組み手を行っている。

片方は鴉の濡れ羽のように艶のあるサラサラとした髪の毛を風になびかせながら、片方は毒々しいふわふわとした紫色の長髪をなびかせながら高速で激突する。

言ってみれば、それはほとんど実践のようなもので。一撃一撃が森の大気を震わせる。

女性が軽く突きを出せばそれだけで大気が裂けるような音がして、少年がそれを両腕でガードしたら水平に十メートルは飛んで行く。

そんなキャノン砲さながらの攻撃をいつまでも受けていられるわけがなく、十回目に少年はゴロゴロと地面を転がった。

「うん。組み手を初めて十日目。一日一回ずつ増えて行ってるね、あたしの攻撃に耐えられる回数は」

「そっか。腕は折れたみたいに毎日痛いけど、ちょっとずつは強くなってるのか」

「比喩表現なく折れてるわよ？　一回受けてるたびに。まあ、そのたびに治癒の魔法をかけてあげてるからね」

「え！？」

少年としては、十日目にして初めての発見である。

そして納得する。あのキャノン砲さながらの攻撃を生身で受けられるほど自分の体は高性能ではなかったと。安心したと言えば安心した。しかし、腕を折りながら平然としているこの女性に少しばかり恐怖心を抱くのもまた仕方のない事実だった。

「カゲロウを拾ってからもう十年かー」

「キーナは、なんだか年をとらないよね。本当はよんじぶぼッ！？」

突然横合いから飛んできた魔力の塊に顔面を殴られ、受身も取れずに数メートル地面を転がった。

それを行った『最悪の魔女』は、にこにこと笑いながらこう言った。

「当たり前よ。霊酒エリクシル作って飲んだんだから。神話に出てくるような不死にはなれないけども、不老にはなったし自然的要因での死亡はあり得ないわ。おわかりかな？」

吹っ飛ばされた少年にすたすたと近寄り手を伸ばす。

少年は若干顔をひきつらせながら、

「……おわかり」

女性の手を取った。

「あと、あたしのことを呼ぶ時は『お母様』か『母上』、『マミー』に『ママ』、普通に『お母さん』でも可」

「お母さん」

「禁断の恋も受付中☆」

ぱちくり、と。可愛らしくウィンクをして見せるキーナ。

少年、カゲロウは呆れたように、それでいて表面には出さず心の中で（四十代のおばさんがしても、ねえ？）と嘲った。

そんな思考は突如襲来した魔力の衝撃波によって中断させられたが。

「お、お母さん。ぼ、僕は別に何も」

「意思を伝えよ。『伝達（テレパス）』。うーん、術式の構築の際に起こる発光現象を見逃してるとは、まだまだね？」

うそだッ！　と少年は若干声を荒げる。

この世界の魔法は何の前触れも起こる奇跡のようなものではなく、ちゃんとした事前現象が起こってから魔法が起こる。

その最たるものが発光現象なのだが、それを隠すのも魔術師としては必須スキルだった。

しかし、注意を凝らしてみれば大体は分かるものであり、戦闘中に隠されたら厄介、といったぐらいのものだった。

しかし。そんな発光現象どころか、魔素の動きさえ感じ取れなかった。

目の前でけらけら笑う『最悪の魔女』を見ながら、心底震えるカゲロウだった。

「お母さんに失礼なこと考えた罰として今から二つ挙げるわ。一つはあたしの好物である食人茸のデラリオマッシュルームを捕ってくるか、今夜あたしの慰み者にな」

「謹んでデラリオマッシュルームを捕って来させていただきます」

十歳の自分がサカった女を相手にするとどうなるか？

一時間後にミイラになっているに決まってる。

魔力を足に纏わせると、一気に森の中へと消えていった。

一人残されたキーナは可愛くない息子にぷりぷり怒りながら、カゲロウが向かった森とは反対側の森に向かって歩き始めた。

「カゲロウくんの好物はデラリオドラゴンのフルコースだったかしら？　今日は邂逅記念日＆誕生日だし、ちょっと奮発しちゃうわよー」

今日も、『最悪の魔女』が住むとされるデラリオ森林は平和だった。

◆◆◆

「そっか。僕、転生してもう十年にもなるのか」

感慨深い表情を浮かべながらカゲロウは木の上を高速で移動する。

自分がこの世界に転生したと気づいた時からもう十年。特筆すべき点は自我がそのまま受け継がれていることと、異常な経験知習得率だろうか。

世間一般の人が十回はやらないと片鱗すら掴めないものを、二回目には軽々こなせる。

そして、そんな異常な経験値でも止まることのない成長率。

ゲームのスキルで言い変えてみると、『経験値十倍』と『限界突破』だろうか。

ようするに、努力をした分だけ結果が出るということだった。

最初この世界に生まれ落ちた時は中世ヨーロッパあたりに転生でもしたのだろうと思った。

母親から捨てられるのも覚えていた。まあ、そんなもんだろうと思い死亡二回でやっと天国かー、などと考えているとそこにあの『最悪の魔女』がやってきた。

黒い外套に黒いとんがり帽子。手には身の丈ほどの杖。

これで、中世ヨーロッパという線は完全に消え失せた。魔女狩りが横行する時代に、そんな格好でいたら即魔女裁判にかけられる。それがどんな無実であったとしてもだ。

というわけで、森＋魔女から童話とかの異世界という結論に思い至った。

「キー……お母さんも、無茶言うよ。デラリオマッシュルームなんて凶暴なキノコ、相手取れるわけないじゃないか」

魔素というモノがある。それは大気中に存在するもので魔力の源にもなるし、生命力の源にもなる。しかし、摂り過ぎがいいというわけでもなく、適度な量を適度に摂ることで初めて体に過不足なく補われる。

魔法学者のルーマ＝アキエラドはある実験をしたという。
高濃度の魔素の中に生物を放置すると、身体にどのような変化を及ぼすか。
トカゲ型の魔物、リザードを十匹ケースの中に閉じ込め、あとから魔素を注入した。一般生活区域のおよそ十倍の魔素を。
一日後、ルーマはケースの中を覗いてみる。すると、驚くべき結果だった。
十匹の内の一匹は体に変異が見られ、他の個体よりも強靭に凶暴になっていたという。後の九匹は死滅した。内側から爆散したように。

ここからルーマの出した学説はこうだ。
魔素とは生物を劇的に『進化』させる促進剤のようなものでもあり、魔素を分解し魔力に変換できる素質は個体によって異なる、と。
「進化じゃなく変化なんだよな。理性を失うことを進化だなんて言わないだろ」
そう言いながら彼は足に魔力を込め、豹のように木々の間をすり抜けながら突き進む。
彼がそのことを知っているのは、母兼師匠でもあるキーナから教えてもらったものだ。
そのキーナが言うにはこの森には通常の三十倍程度の魔素が充満

しており、普通だと息をするのも困難らしい。カゲロウの生みの親はよほど魔素の耐性が高かったみたいだ。

なので、ここに生息する生物――魔物は他の場所とは一線を画す強さに仕上がっている。近隣の諸国がここの開拓に乗り出し騎士団を派遣するが、そのどれもが失敗に終わるほどだ。

「あー、どうしよ。面倒くさいな。けど、持って帰られなかったら、」

ごくり、と。彼は小さな喉を動かした。

もしの話だが、もし持って帰れなかったとすると、カゲロウの運命はミイラ一直線だ。

「キシャァアアアッ！！」

「……相変わらずグロテスクどうしてそんなに気持ち悪いのねえ教えてよ」

いきなり辛辣な言葉を並べまくるが、そんなことは聞こえやしないのは分かりきっているので臨戦態勢に入る。

全長十メートル。触手のような胞子を射出する機関は絶えずミミズのようにうねっており、その中心部分とも言える場所にクラゲのような傘をもったキノコが居る。その支配域は半径百メートルにも及ぶとされ、一度捕獲の対象にされてしまったが最後、あの膨大にある触手の一本に捉えられ骨になるまで胞子の触媒にされる。

「……どうしよう。逃げたくなってきた」

「キシャァァ」

どこに発声器官があるかは知らないが、食人茸と呼ばれるほどだ。どこかに恐ろしい口があるのだろう。養分は好きな時に根を下ろせるので別に口を使う必要性などないのだが、それは欲求からか。口からも養分を摂取するらしい。

ズババッ！　と。無数の触手がカゲロウの小さな体に向かって振るわれる。

後退しながらそれらをどうやってすり抜けるかを考える。炎属性で焼き切るのが一番。

だが、それをやると中央に生えているキノコも灰にしてしまう可能性があるため却下。風属性で周りの触手を切り刻むという方法も却下。そこまで正確な照準はつけられない。水属性で凍らせる、なんて案も浮かんだが十メートル四方を完全凍結するってどんなだよ、ということで却下。

「キシャアアアアアアアアアア！！」

四方八方から一本一本が人の胴ほどもある触手が一斉に襲いかかる。

しかし、それに対して彼が行った行動は簡単だ。

だらりと下げた右手の人差し指を、ついっと。そんな簡単な動作しかとらない。

それだけで、迫ってきた触手が四方八方へと千切れ飛ぶ。

「お母さんには内緒だぞ？　変態的な研究者魂に火をつけられても困るし」

今度は中指と小指を同時に動かす。

瞬間。ゾゾゾッ！　という音とともにそこら中の触手がそこら中の生えている大木に縫い付けられた。縫い付ける、というぐらいなのだから糸を使っているのだろう。
そう、糸は遣っている。魔力で出来た、だが。
ほぼ透明な直径一ナノメートルほどの糸が束となって触手を抑えつけている。

「ん。たしかデラリオマッシュルームはキノコの部分だけしか食べれなかったよな」

周囲のビチビチと蠢く触手を踏みつけながら彼は中心へと突き進んでいく。
そこには、「キシャッ！」と奇声を発するキノコが居た。ちゃんと口も付いている。大きさは一メートルほどだろうか。全体からみれば小さいが、十分巨大なキノコだ。

なんだかかみつこうとしてきたキノコを『糸』を使って根元からバッサリやると、バッタリ動かなくなった、というわけではなく、本体はこちらなのでビチビチと動いていた触手の方が動かなくなった。

「キシャキシャッ」

「……なんていうか。お母さんはこれが好きなんだよな」

はっきり言って、醜いことこの上ない。
傘の部分は赤や紫と言った警戒色で、幹の部分は口だけがついている。人を食べている怪物を食べるという発想形態を賞賛したいぐらいだ。

「キシ」

「うるさい」

束にした糸で口を覆い包む。

たしか、曲弦師だったっけ？　と、この魔法の基本理論となる情報を思い出す。

はっきり言えば、この魔法の発動の難易度自体は簡単だ。魔力を細長く伸ばすだけ伸ばすだけでいいのだから。

しかし、形成したその糸を維持するのが難しい。気を抜けば一気に鉄パイプほどの太さになってしまう。それに、糸という見た目には出来るが、糸という強度にするのが難しい。

現時点での糸が吊り上げられるのは一本当たり十キロ。最大本数が二万本なので、軽く見積もって二十万キロ、おおよそ二百トンまで釣りあげられる。

理論上では、なのだが。一本一本の強度が低いので攻撃に使えばブチブチ千切れるし、二万本も一気に出してしまえば、確実に倒れる。安全に使えるのは精々二千本ぐらいだろうか。

糸の強度上げが急務である。

「って、そんなことどうでもいいから持って帰ろう。食人茸さんがなにやら息苦しそうになってる」

「ッッッ！」

面倒くさそうにデラリオマッシュルームを担ぎあげて帰ろうとした時、自分達が使っている拠点よりももっと向こうの方から、ドガガガガッンッ！！　という爆撃音が耳に入った。遠目から見ても分かるほど木を吹き飛ばしている。

「……うん。僕のお母さんはとっても規格外だ」

あちらは確か森の主、デラリオドラゴンが居る場所か。
巨大な体躯をした中位の竜種で、一国を傾かせる実力を持つはずだ。

「たしか、このキノコを腕の一振りで蒸発させるような脅力を持ってたような持ってなかったような」

まさに森の主である。
そんな存在とやりあえる存在など、カゲロウは『最悪の魔女』ことキーナ以外知らなかった。きっと笑いながら戦っていることだろう。

カゲロウの編み出したこの『曲弦師』だって、多分腕の一突きで全て貫通できる。
彼としたら、強さとかはどうでもよく、普通に生き残れればいいかな、程度であるので嫉妬心は無いが、羨望の眼差しぐらいは浮かべる。

いいなー、格好いいな、程度である。それ以上の感想は抱かない。

爆音が止んだ頃にゆっくりと戻り始めたかげろうだったが、ふとキノコに目線をやるとほとんど死んでいた。植物なのに肺呼吸ってどうなの、とこの世界のどうでもいい不思議に触れたりしたがどう

でもいい。

カゲロウが拠点に戻り、木上豪邸（ツリーハウス）で休んでいると、ズシン！　ズシン！　というバカみたいな振動が伝わってきた。

「カゲロウく～～ん。お誕生日おめでとー！！　デラリオドラゴンのフルコースを作ってあげるからねー」

「……、」

いくら大好物だと言っても、ビル十階建てほどもあるドラゴンをどうやって食せというのですか母上、と絶句しなかった。

とにかく、カゲロウは今の生活に満足している。

これ以上の生活も、これ以下の生活にも、興味はなかった。

世界が『大戦』の最中であるということも知らずに。

第一話：転生とか（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二話：いろんな説明とか（前書き）

読んで下さった方々、ありがとうございます。
では、どうぞ。

第二話：いろんな説明とか

「魔法とは、世界に干渉して不自然で不可思議な現象を起こすことよ。触媒もなしに炎を燃やしたり、局地的に温度を急激に下げたりするのは、普通はあり得ないからね。だから、そんな不自然で不可思議な現象を起こすためにはそれなりの代価がいるの。それが魔力なわけね」

『最悪の魔女』は小さな小さな少年に向かって話を続ける。

「魔力って言うのは生命力とほぼ同義で、魔素を体内に取り込むことで魔力を得るの。魔法学者のルーマ＝アキエラドは――（中略）――って言ってるわけ。これは大体は合ってるわ。現に、この森に棲んでる魔物は他とは一線を画す強さに仕上がっているから」

『最悪の魔女』は首も傾げない少年に向かって話しを続ける。

「まあ、ちょっと話は逸れちゃったけど。で、その魔力を世界に渡すわけ。そうすると、世界にちょっとした歪みが起こるの。そこにあった魔力が一時的とはいえ完全に世界から無くなるわけだから。で、そんな歪みが起こるのが魔法発生の際に生じる事前現象ってわけ。それは発光であったり、そよ風だったり、温度の変化だったり、いろいろあるわけ。で、そこから世界にお願い事をするの。『非力な私に代わって力の執行を』みたいな。その強さは渡した魔力の量にも依るわけだけど、ようするに世界をおだてればおだてるほど世界はいろんな力を執行してくれるの」

『最悪の魔女』は少し喉が渇いたのか木製の容器に汲んであった水を少し飲んだ。

「まあ、これがものすっごく噛み砕いた魔法理論の超基礎の基礎なんだけど、分かったかな？」

少年は、静かに頷いた。

そして、こう口を開いた。

「とりあえず、精神科に行った方がよくない？」

小さな少年、五歳の時だった。

◆◆◆

「カゲロウくーん。起きて、朝だよ」

「……お腹が、重い」

最終的に完食はできなかった。当たり前だ、自分の体積より大きなものを食べられるのは二次元の中だけである。

のっそのっそとベッドの中から這い出ると、少しだけ目眩がする。きっとキーナがどさくさにまぎれて酒でも飲ませたのだろう。若干息が酒臭いのが感じられた。

「お母さん、十歳に酒を飲ませるのはどうなの？」

「普通」

がくんと肩を落としながら、カゲロウは寝室を後にしてリビングに値するところに行く。

そこにある円形テーブルの周りに置いてある椅子に腰をかけると机に突っ伏した。前世でも感じたことがない二日酔いの気分だ。

「お酒は二十歳から」

よくあるフレーズを口にしながら、この世界の成人は十五歳だったか、とか言ってみるとなんだか異世界というよりタイムスリップした気分になる。

この世界の文明レベルがどの程度かは知らないが、おそらく中世から近世ヨーロッパぐらいだろう。科学の代わりに魔法が発展していればきっとこんな世界になっていたのだろう。

「水、水が欲しい」

アルコールで焼けた喉をなんとか潤すべく、ゆるゆると立ち上がり台所に向かった。

この世界にしては異例の蛇口がある。もちろん世界を見回しても数少ないだろう。

水道管を地下の貯水タンクに降ろしている。蛇口に魔力を流し込むと貯水タンク内にある魔導具が反応し気圧を変化させ水を汲み上げる仕組み、らしい。

建設費は？　と聞くと、タダ、とのことだった。

材料から設計、建築に至るまで自分で用意し、自分で作ったから

だろう。

そんなわけで、木製のコップを手に取り、蛇口に当たる部分に手を当て魔力を流し込む。すると、勢いよく水が流れ出てきた。水を止める際は魔力の供給をストップさせるだけでよかった。

並々注いだ水を零れないように口に運んだ。

「……ぷは。生き返らない」

所在なくあたりを見回すが生憎干し肉などしかない。もう肉は一週間見なくても平気である。

とりあえず、リビングに戻った。

「朝ご飯は、あっさりしたものがいいよね？　昨日はあたしもやりすぎたと後悔してるし」

「いや、いいんだけど。お母さんの料理は美味しいし」

「わー！　カゲロウくんが久しぶりにデレたーっ！」

キーナに頭をわしゃわしゃと撫でられ、抱きしめられる。豊かな胸に挟まれる形で少しだけ居心地が悪かった。

「よーし、じゃあちょっと待ってなさい！　思う存分あたしの味を堪能させてあげるからっ！」

「……、」

聞き方によっては随分と卑猥に聞こえるのだが、もちろんそんな

言葉ではない。
意気揚々と鼻歌交じりに今さっきまでカゲロウがいたキッチンに向かうキーナ。こんな姿を見ると、彼女は普通の女性に見える。しかし、戦闘においてはほぼ無双状態の魔女であるのは分かりきったことだった。

白い彼女と、黒い彼女。
相反する二つをもちながら、それは表裏一体というより一心同体といった方がいい。
彼女が何故『最悪の魔女』などと自称しているのか分からないが、大した興味も無いので触れないでおいた。

時折キッチンの方から聞こえてくる一爆発音（マジカルクッキングの効果音）にびくびくと怯えながら二つあるソファの内の一つに腰をかけた。

ドガンドガガンドガッガガンガガガンドドドガンドドガンドドドドドドッドドドガンンッ！　と少しだけリズミカルな爆音という名の幸せは耳の方には幸せではない。
一際大きな爆音が響いたと思うと、森に静寂が訪れる。

「……戦場じゃないんだから」

耳に指を突っこんだまま、言っても無駄なことを呟いてみるカゲロウ。
無駄なことは無駄であって、決して無力ではないと言うがこの場合はそれは例に外れる。
おおよそ五年間。朝の爆音どうにかならないかとカゲロウは頼んだが、ムリの一言でいつもバッサリ切られ続ける。不憫な十歳男子だった。

「出来たわよ～。デラリオドラゴンの骨を煮込んで作ったあっさり仕立ての香草スープにー、デラリオマッシュルームのお刺身にー、イチコの実のフルーツジュース！」

なんだか、凄いのが出てきた、と若干顔をひきつらせる。

「……いつも思うけどさ、あの爆音はなんなの？　必要なの？　っていうか、あの爆音から何でこんな綺麗な料理ができるの？」

「あたしの激しい愛が爆発しております☆」

「……、」

天井を眺めて、キッチンの方に視線を移して、最後に料理に目を戻した。

「いただきます」

「無視ッ！？」

フォークとスプーンを駆使し、ぱくぱくと料理を口に放り込む。なんで悔しいのが分からないほどに美味しかった。

イチコの実というのは、イチゴの味をしたオレンジといったところだろうか。

「どーかな？　お母さんの手管は見事なものでしょ」

「……、ぱくぱく」

「あるぇ～？　む、無視……」

「……美味しいよ」

「このツンデレめ～♪」

「それについては少しだけ反論したい。ツンデレというのはそもそも、ツンとデレが共存した状態のことを言うのであって――（十分経過）――というわけなんだよ」

「なふー」

今度は逆にキーナの方が耳を塞ぐことになった。

そこから、キーナが話しかけてカゲロウが無視して、カゲロウが無視してキーナが話しかけて、カゲロウが話しかけてキーナが意気揚々と乗ってきて、カゲロウがテンションを落として、キーナがテンションを上げる、といったことが朝ご飯を食べる終えるまで延々と続いた。

朝ご飯を食べ終え、一息ついたところで、暇だったカゲロウがこんなことを聞く。

「なんでお母さんはこんな森にいるの？」

別にあまり興味は無いのだが、なんとなくといった言動だ。キーナが言い淀むのなら深くは言及しないし、嫌だというのなら今後一切それに関わることは口にしないつもりだ。

しかし、キーナは別に気にした様子も無く、さらりとこんなことを言った。

「うん。追放されちゃったんだよね、国に」

「国外追放？」

「ううん。ほとんど死ねって言うようなものだよ。その国って言うのが魔術国家フレメアでさ、そこの技術は一つたりとも国外には出さないっていう掟があって、今では少しだけ緩んでるらしいけど、ほとんど情報が漏れてないわね」

「ようするに、今も本当はその国から命を狙われてるってこと？」

「そうだね。魔術師団一個大隊を相手取った時は流石に冷や汗が出たけど、まあその程度だよ」

一個大隊って一人で相手取れるものなのか？　という疑問はこの女性には通用しないとして、

「なにしたの？」

そんな死刑宣告を受けるぐらいだからなにかをしでかしたのだろう。それも『最悪の魔女』と呼ばれるようになるほどの。

「戦争でいっぱい人を殺しちゃったぐらいかな」

「普通じゃん」

それならば普通であれば英雄と讃えられるのではないだろうか。

戦時中は敵国の兵士を多く殺した者ほど名声が勝ち取れる寸法だ。国から奨励されるようなことはあっても、国から追放されるようなことにはならないはずだ。

「どこでそんなことを知ったのか知らないけど、まあいいわ。その戦争中にあたし、『歩く無敵要塞』とかって渾名をつけられてたんだけど、その名の通りあたしが出張ったら速攻で戦争終了。おしまいおしまい、みたいな感じだったのよ」

うんわかる、という言葉は飲み込んで、先を促した。

「そうなると、それを快く思わない『他国』の連中が出張ってくるわけね。少しやり過ぎなんじゃないか、って言ってくるわけ。それにいくつもの大国も便乗してくるの。分かる？　よくあるいじめの描写よ」

「でも、お母さんの実力だったら」

「うん、そうね。あたしならそれら全てが連合を組んできても生き残る自信はあったわ。けどね、上の連中はそうではないの。保有する戦略兵器（あたし）を手放せば、とりあえずの安全は確保できる、っていう馬鹿な結論に至っちゃったわけ」

「……ようするに、」

カゲロウが言い終わる前に、キーナは言葉を差し込んだ。

「うん、切り捨てられた」

「……」

「戦争なんてそんなものよ。善意で戦っても、悪意で戦っても、それがどんな戦績をあげてもあげなくても、切り捨てられるときは切り捨てられる。民衆の気持もそうなの。もしかしたらなんていう不確定なものは求めずに、安易で簡易的な安全を求める。だからこそ、戦争って起こるのかもね」

安全を求め、欲するために、人は戦争、争いを行う。

なるほど、とも思う。

ようするに自分には関係がないわけか、と。

「やー。カゲロウくんは冷めた考えを持ってるわねー」

「……また『伝達（テレパス）』か」

やはり魔法行使の感覚はしなかった。それにしてもいやらしい魔法だな、と思ったが、この思考も読まれているということはなにがなにやらわからないという結論に達しそうで怖い、というわけで考えるのをやめたカゲロウ。

「おりょ？　十歳特有の『女への興味』とか無いか考えてたけど、皆無だね。もしかして、男色？」

「それだけはない。お母さん、それだけはないよ」

なんだか切なげな表情でキーナを見つめるカゲロウ。なにか暗い過去（？）でもあるのだろうか。

キーナも、「そ、そーなの」と顔をひきつらせながら『伝達』の魔法を解除した。少しだけ黒い過去に触れたのか、物憂い気な表情

でカゲロウを見ていた。

「まあ、いいわ。暗いお話はやめにして、練習にいこっか」

胸の前で小さく一回だけ拍手をすると元気良く立ち上がった。

それをカゲロウは見上げながら、ゆっくりと立ち上がる。

「よーし。今日もあたしのキャノン砲パンチを十回しか耐えれることができなかったら、筆おろしを敢行いたします☆」

「一回でも多く耐えれたらいいんだよね？　だったら簡単だよ」

「ほほう。ならば一撃に込める魔力量を少し増やすとしますか」

「……本気じゃなかったのかよ」

「あたしが本気でパンチをするとカゲロウくんの体が四散します」

「……鬱だ」

とりあえず両手両膝を床につけて落ち込むカゲロウ。見事な水平を背中で作っていた。

「落ち込んでないで、さっさと行くわよー」

襟首を掴まれてずるずると引きずられていくカゲロウ。

そこで、ふと気になることがあった。

「そういえばさ、なんでお母さんは僕のことを拾ったの？」

それこそ、なんと答えられても傷つかない覚悟を持って聞いた。カゲロウだって、キーナに少なくは無い好意を持っている。自分を拾って、何も分からない自分を育てて、掛け値なしの愛情を込めて笑ってくる人に対して、あっそう興味無いね、程度で終わらせるほど人間はやめてはいなかった。

キーナは特に考えずに、こう言った。

「なんとなく」

はは、と。カゲロウは少しだけ感情を込めて笑ってみた。

そして、あとひとつ、質問したいことがあった。

「そしたらさ、お母さんは何で僕を鍛えようと思ったの？」

これの答えも、なんとなく、というに違いないと思っていた。

一秒後には返答がくると思っていたが、十秒、二十秒と待ってもなかなかこない。

ふと、視線をキーナの方にやると、少しだけ神妙な顔をしているのが目に入る。

はて？　と思い、どうしたのと聞こうとしたが、その前にキーナが口を開いた。

「まあ、我が子に強く在ってほしいと思うのは、親の罪ということね」

目を合わせずにキーナが話すときは、大体嘘だということは知っていた。

だけど、彼女が言いたくないのなら言いたくないのだろう。これ以上気にしても面白くなさそうだったので、カゲロウはずるずると

外へと引きずられていった。

第二話：いろんな説明とか（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、謹んでお待ちしております。

第三話：思惑とか（前書き）

懲りずに第三話。
ではどうぞ。

第三話：思惑とか

「ゴオオァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

「ぬぐぐ」

身長が伸びた黒髪黒目の少年。実はこの世界では珍しいのだが、それは今関係の無いことだ。

その少年、カゲロウの前にいるのは、この森の主、デラリオドラゴン。

全長一〇メートル超。前肢は大木を何本も束ねたものより太く、その先にはアダマンタイトと同程度の強度を持つとされる竜の爪が生えている。

後肢もそれを支えるに相応しい太さで、四足歩行型の竜。地竜（グランドドラゴン）としてはかなり強い部類に入り、中位の竜種の中でもかなりの実力を持つ、緑色の体躯をしたドラゴンだ。

「ぬぐぐ」

「ゴオオオオオオオオッ！」

そのデラリオドラゴンの突進を真正面から受け止めているのは少年の腕――なんかではもちろんなく、この数年間で強度を上げた『曲弦師』の糸だ。

年齢の上昇とともに魔力量も増え、最高本数も四万本になり、一本あたりの強度も一〇〇キログラムに達した。

ようするに、理論上では四千トンの衝撃を受け止められるわけだ

が、やはり一度に出せる糸の本数には限りがあるので二万本で対処をしている。

しかし、目の前のデラリオドラゴンの突進はその糸をぶちぶちと音を立てて千切っている。そのたびに新しい糸を張っているのだが、それも次々と千切られる。

とりあえず、少年はこう言う。

「ぬぐぐ」

対して踏ん張っている表情も見せずに、「ぬぐぐ」という姿はなにか滑稽なものがあった。

別にカゲロウに余裕があるわけではない。こうしている今もぶちぶちと文句を言うかのように糸が千切れていっているし、魔力の方もガンガン減っている。

だけどカゲロウは続ける。

「ぬぐぐ」

「ゴォウ……」

デラリオドラゴンが一旦後退する。ひとまずの休憩ができるわけだが、そんなことをデラリオドラゴンが許してくれるはずもない。

ベゴォッ！！　と、強靭な根を張った森の地盤が陥没するほど四本の足を力ませる。

ドパンッ！！　と。踏み込みと同時に強固な地盤をめくり上げ、超高速でカゲロウの体めがけ突進を繰り出す。

ブヂブヂブヂブヂィィッ！！　と、糸が千切れ、一気に押し込まれる。
指で操ろうとするが体積比も重量比も違い過ぎて話しにならない。
断続的に糸が千切れ、魔力消費も馬鹿にならない。さらに身体強化の魔法も施しているのだが、どれもこれも大して意味を成していない。

ああ、最強ってなんだろう。そう思う今日この頃のカゲロウだった。

最後の百本ほどが一気に千切られる。それはもう普通の糸屑のように。
今まさに、彼が挽肉にされようとした時、デラリオドラゴンの動きがビタリと止まった。
そして、ゆうに少年の体躯以上はある顔を彼に近づけた。

ぺろぺろ、と。ナマヌルヌルの下で唾液まみれにされるカゲロウ。
「こらやめろ」とやる気なく嫌がっているあたり、このデラリオドラゴンはなんなのだろうか。

「いつも悪いねー。特訓相手になってもらっちゃって」

「ゴウ」

二人（？）の出会いはこうだった。

傷つき痩せこけたデラリオドラゴン。
縫合治療をしてやり手厚く看護してやるカゲロウ。
懐いた。

猿でも分かる三段論法を見事に実演して見せたカゲロウ。カゲロウとしては、「なんだか美味しそう」と太ってから食べるつもりだったのだが、愛着が沸きそのままである。

そういえば、このデラリオドラゴンに傷を負わせる魔物ってこの森にいたっけ？　という当たり前の疑問が浮かぶが、それはまあキーナだろという結論に至り今の今まで過ごしてきた。

しかし最近。森の外があわただしい。

『曲弦師』の最大効果半径は三キロでそれ以上先のことは分からないのだが、なにかが攻めてきている（？）ような気がするのだ。

それも前世で言うゴキブリのようにわらわらと、次から次へと湧いて出てくる感じの。

おそらくキーナも気付いているだろうがなんの対策もしないところを見ると、別にこれと言った脅威ではないのだろう。その証拠に森の入口でその侵攻は終わっている。

カゲロウはデラリオドラゴンの鼻先を撫でながら森の外に意識を向ける。

興味は、全くと言っていいほどない。

ただ、十六年間過ごしてきた森を荒らされるのは少しだけ忍びないモノがあった。カゲロウだって、いくら根暗でいくら冷めていようが一人の人間だ。辛いことは辛い。

「まあ。本当に危ない時は、お母さんが出るかな？」

「ゴウ！」

顔にデラリオドラゴンの生温い吐息を浴びながら、打算的な決断

を下す。
別にこの決断が後に人生を左右するということは無い。

◆◆◆

「この森に、『最悪の魔女』が……」
おおよそ二十名。西洋風の甲冑に身を包んだ人間達がデラリオ森林の入り口に立ちつくす。

曰く、入れば二度と戻って来れない。
曰く、『最悪の魔女』の怒りを買えば国が滅びる。
曰く、この森の魔物は悪魔だ。
曰く、――――女と見紛うほどの男が『最悪の魔女』に子飼いされている。

挙げればキリがない。
そして、この魔素の濃度。何の装備もなしに迷いこんだりしたら、一日と経たず体が内側から爆散する。

しかし、だ。
西洋風の甲冑に囲まれた金髪碧眼の女性、フリージアは、どうしてもこの森にいる『最悪の魔女』に会わなければならなかった。

曰く、『最悪の魔女』の戦力は古代魔法を内包した兵器約千機分に相当すると。

長く続きすぎた『大戦』。それを終わらせるためには、誰もが平伏すような戦力を少し振りかざせばいい。そうすれば、頭を垂れる。

平和を求めた、暴力。

暴力でしか得られない、平和。

もう、これしかない。

そう思わなければ、やり遂げれることなど一つもない。

「目標は『最悪の魔女』。作戦内容は『最悪の魔女』との交渉。行くわよ」

彼女の名は、フリージア＝アイゼンハート。

広大に広がるデラリオ森林にほど近い、アイゼンハート王国の第一王女。

このとき、彼女は間違いを下していたのかもしれない。

それは、大いに彼女の人生を左右するほどの重大な間違いを……。

第三話：思惑とか（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

十月十四日。

『捕獲』の部分を『交渉』に改訂いたしました。

第四話：冗談とか（前書き）

遅れました。眠気って恐ろしい……。
では、どうぞ。

第四話：冗談とか

「はー。僕は何でこんなことをしてるんだろ」

虚空に浮かぶ淡い青色の光を放つ三日月。

それを体中に何の障害も無く浴びることができる場所はデラリオ森林にはあまりない。

そのうちの一つがカゲロウたちが住むツリーハウスの頂上。全高一〇〇メートルの大木である。

その上に、カゲロウは一人体育座りで月を眺めている。

昼過ぎのことだった。カゲロウがデラリオドラゴンとの特訓を終えたあと、適当にデラリオマッシュルームでも狩ってキーナのお土産にして帰った時、いきなり肩を掴まれてベッドの上に引き倒された。

遂に発情したか、などと思っているとキーナが、

『緊急事態発生（えまーじぇんしー）緊急事態発生。あたしの森に侵入者ありとの報告が入ったー。至急侵入者を排除されたしー』

『そんなのお母さんがやればいいじゃん』

『あたしは人間とあんまり会いたくないのよ。……じゃなくて、上官の命令に逆らうと言うのかー。ならば仕方があるまい。今から貴様に二つの選択肢をやろう。一つは今すぐ侵入者を排除しに動くか。二つ目は、あたしとここで淫靡でえっちぃことをちゅるちゅるやっちゃうか』

『謹んで引き受けさせていただこうか上官殿』

『よろしい』

カゲロウは月を見上げながら指をくいくいと動かす。
その指先から伸びているのは『曲弦師』の糸である。強度を極限まで弱くした糸で、それをツリーハウスから半径三キロまで伸ばし張り巡らせている。
空気の振動や糸の切れ方によって対象の形などを感知し、それを動かしながらより正確に森の中を把握する。

しかし、三キロ圏内を探るも探るも、感知できるのは魔物ばかり。特訓相手のデラリオドラゴンが寝息を立てていたり、デラリオマッシュルームが可愛らしいウサギ型の魔物を触手でゲフンゲフンしていたり、森の中は生命が息づいている。

「はーあ。どんな相手か聞いとけばよかった。っていうか、何でお母さんが出ないんだよ」

あのあと、こんなやりとりをキーナとかわした。

『どうやって探るの。僕じゃこの広大な森を駆けずり回って人間を見つけるなんてほぼ不可能だよ』

『カゲロウ上等兵。貴様はチカラを隠している……。それは……（ほら、カゲロウくん。効果音プリーズ）……』

『でん、でけでけでけでけでけでけでけでけでんっ、ででんっ！！』

『貴様が隠している能力、それは、曲弦師だーっ！』

『な、なんだってー……。じゃなくて、なんでばれてる』

『母の偉大なる愛の力（ストーキングなめんな）』

というわけである。

必死に隠し通してきているつもりだったのだが、なんだかよく分からない力に看破されたようだった。

そんなことより、なんで自分をこんな事に起用するのか。

キーナが動けば、いや、動かずとも彼女は坐したまま魔法を、それも広域殲滅系統の魔法を正確照準、そして高速連射によって跡かたも無く侵入者など消してしまうだろう。

もし、だ。

もし、この侵入者とやらがキーナよりも戦力が上で、キーナ自身もそのことを理解したうえでカゲロウを侵入者撃退、および殲滅に起用したとしたのなら。

自分は、捨て駒にされたのではないかと。

そう思ってしまった、自分がここにはいた。

カゲロウは静の表情を少しだけ烈に変え、指を大きく弾いた。

視界の隅で弦楽器のような、ポロンという音とともに森の一部が崩れ落ちた。

「……なんで、なんでこうも僕は根暗で、冷めた考えしかできないんだよ。自分の大切な人を、なんで何も考えずに信じることができないんだよ。クソ」

カゲロウはため息をつき、虚空に浮かぶ青白い三日月を見つめる。
あそこには、なにもないのだろう。
今の自分だって、一つでも失えば全て無くなってあの星と同じになってしまう。

母、という一本の柱を失えば、あの無の星と、同じになってしまうのだ。

もう一度、ため息をついた。
ぴくり、と。

カゲロウは、森に視線をやる。

「誰かは知らないけど、まあ、いいさ」

カゲロウは一〇〇メートルの木の上から、一歩足を踏み出す。
そして、ふぉん！　と空を切った音がした後には、何も、誰も残らなかった。

「……我が子は、可愛いもんね。がんばれ、カゲロウくん」

◆◆◆

最初、デラリオ森林に突入した二一人の人間は、その数を一六名

に減らしていた。アイゼンハート王国が誇る精鋭騎士十傑もその中には含まれていた。
それを聞いても、誰も笑うことは無いだろう。
この森に入ることは、遠方からの爆撃系魔法の嵐の中を裸で突っ切るよりも無謀だと言われるのだから。
いかに精鋭騎士だとしても、そんな暴嵐の中を裸で突っ切ることは難しい。無理ではないと言うのも恐ろしいのだが。

森に一歩踏み込んだ瞬間、地面が隆起する。
そこから出てきたのはデラリオワームと呼ばれる白いミミズのような魔物。ミミズ、と言われればなめてかかる者もいるだろう。実際、この魔物の討伐にそんな気持ちで挑んだものは少なくない。
そしてその姿を見たときに絶望するだろう。
全長六メートルほどのミミズが、大きな円形の口を開けて高速で襲いかかってくる。
それに一瞬対処が遅れた若手の騎士が飲まれ、ばぎぽきゃ、と肉が潰れる音が断続して聞こえた。

それを王国騎士近衛師団団長、二つ名を『聖騎士』と呼ばれる男が腰に携えた『聖剣』で一太刀の下切り捨てる。

一時間後。傍らの茂みががさりとざわめいたことに気付いた時にはもう遅かった。
デラリオエイプと呼ばれる集団で行動する猿のような生物がそこから十頭ほど現れた。
先頭を歩いていた騎士がそのうちの一頭をなんとか切り捨てるが、その他十頭が一瞬で近寄り彼を木の上に連れ込む。
十秒後、彼の悲鳴とともに、血の滝が流れた。

それをアイゼンハート王国第一王女兼王国魔術師団門外顧問でも

あるフリージアが魔法陣を宙に発動させ、その砲口を木上に向け、放つ。
直径五メートルほどの火柱が噴き出し、木を一瞬で炭化させた。
それからも、遠くから竜の咆哮が聞こえたり、デラリオマッシュルームの触手範囲に入ってしまったりと、散々なものだった。
それでも、十六人残ることができた。これは歴史的快挙と言っていいだろう。
今では太陽がその身を隠し、代わりに月がその座についている。
「魔素が、濃すぎるわね。魔素調整魔導式口当てがなければ危なかったわね」
一日と経たず内側から爆散するような魔素の中で正常な思考を保っていられたのにはわけがあった。
この捜索隊とでもいうのだろうか、騎士やフリージアの顔には何かがつけてある。
それは通称フィルターと呼ばれる物。魔素の濃い秘境などを探索する際には必須とも言える物品だった。形は鉄製のマスクのようなもので、鼻から口までを覆っている。
そんなフィルターでくぐもった声で傍らに控える男性に声をかける。
「セルヴィ。あと、どのくらいかしら」
「あの巨木の高さはおよそ一〇〇メートルとされます。この地点であれほどの大きさに見えると言うことは、あと三キロほどかと」

セルヴィと呼ばれた人は堅苦しい雰囲気を纏わせたまま丁寧に説明する。
この人こそがこの捜索隊を実質指揮する『聖騎士』と呼ばれる騎士団長だった。
髪の色は紅で短髪だ。瞳も鮮血のように紅く、しかしどこか中性的だ。

「そう。あと、ちょっとなのね」

彼女は高い木々の隙間から見える、一層高い巨木を見据える。
あそこに、『最悪の魔女』がいる。
そう、胸を高鳴らせた時だった。

ふぉん、と。
そんな音が耳に入った時には、もう遅かった。

音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。

音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。
音も無く、騎士の一人が闇に消えた。

気付いた時には、周囲にはフリージアと、セルヴィしか残ってはいない。

「こんばんは、侵入者御一行様」

突如、上方から声がする。声の具合からして男だろう。
二人は恐る恐るといった様子で、戦場においては馬鹿ともとれるようなゆっくりとした速度で顔をその方向に向けた。

そこには、男（？）がいた。
髪は月明かりを浴びながらもその黒さを衰えさせることのない黒髪。
瞳は高位の竜種が数十年かけて生成すると言われる、それも黒竜の竜玉のように漆黒。
肌はそれらに相反するように、まるで新雪のように柔らかな白。
ともすれば、女とも見えるような男だ。

二人は一瞬その瞳に吸い込まれそうになり放心するが、すぐに臨戦態勢に入った。

男は、宙に立っている。
この世界にも飛翔系の魔法はあるが、その場でホバリング、それも微動だにしないとなると難度は一気に上がる。ちょっとした微風ですら予測し、それに合わせて魔法の微調整しなければならないか

らだ。

それが出来ている時点でこの男は、かなりの腕前だ。

油断など、出来やしない。

フリージアは一回深呼吸をする。

そして、乱れかけた精神を正し、沸き起こる興奮を胸に抑えつけながら、王女としての風体を保ち、男に声をかける。そしてそれは友好的なものではない。敵意だ。

「あなたは『最悪の魔女』に子飼いにされていると言う男なの？」

「子飼い？　違う違う。お母さん。親子だよ親子。お・や・こ」

「それはありえないわ。『最悪の魔女』は愛した男からも国を追われるときに敵対し、その男を広域殲滅魔法で軍隊ごと消している。その他に男性関係は無かったと聞くけど？」

「んー。血は繋がっていない、僕は捨て子だよ。お母さんが拾ってくれたんだ。もしかして、血が繋がっていないと家族にはなれないっていうほど狭量な女性なのかな？　うーん。世界広しと言っても、人間の心は狭いものだなー」

なんてことを無表情で淡々と言ってのけた男。

一国の王女にこんな態度をとることに憤慨したのだろうか、セルヴィが一歩前に出る。

「貴様、一国の王女に対して……死にたいのか」

「それは自殺を促す言葉だったりする？　僕、自殺って怖いから出

来ないんだよね。何度かしようと試みたもんだけど、うん、ムリ」

そんな飄々とした態度に今度こそ激怒したのか、騎士団長セルヴィは腰の『聖剣』に手をかける。

もう一歩前に出て切り捨てようと考えたのだろうが、それを華奢な腕に阻まれる。

フリージアだ。

「で？　僕の大事な大事なお母さんに何の用かな王女様」

「……『最悪の魔女』に我が国の軍門に降るように言ってくれないかしら」

「え？」

そこで、初めての表情を見せる男。ポカン、という音が似合いそうだ。

しかし、すぐに無表情に戻ると、

「それって、どういったご冗談で？」

「冗談でこの森に入ると思っているの？」

「冗談でこの森に入れないような奴が、どうして『最悪の魔女』を軍門に降らせることが出来るんだよ。言っとくけど、お母さんは冗談みたいな強さだよ」

「……、」

そのことはフリージアもセルヴィも分かっている。もし、伝承ど

おりの戦力ならば、こんなところで苦戦している暇などない。力で屈服させるにしても、こんなところで躓いているようでは話しにならない。
だからこその、
「何か、秘密兵器でもあるのかな？　会いさえすれば、屈服させられるような、何かが」
「「ッ！？」」
聖騎士と第一王女は一気に展開する。
男の言う通り。二人というよりはフリージアには男の言うところの『秘密兵器』がある。いや、『自爆兵器』かもしれないが。
無視する手もあったのだが、男はほぼ確信していたのだろう。
フリージアは華奢な体からは想像もつかないような現象を引き起こす。
足の一蹴りで大木をへし折り、それを拳の一突きで砕き、散弾状に広がった数千もの木片が男に襲いかかる……はずだった。
ぴたり、と。数千にも及ぶ木片の全てが、空中で動きを止めた。
「素晴らし過ぎて怖い身体強化だけど、選択が違うね。まだ、大木をそのまま投げ飛ばした方が効果があったよ」
「私だけじゃないのよッ！！」
ビュガッ！　と、数十もの風の刃が多角的方位から一斉に男に襲いかかる。

男は、今度はそれを避けた。
弾丸のように射出された数千の木片よりも、数十の風の刃を危険視した。

つまり、

（……切断系統に弱いッ！）

「我が剣を研ぎ澄ませ、『風纏（ウィンドテープ）』！！」

そのことにセルヴィも気付いたのか、風の魔力を纏わせ剣の切断力を上昇させる魔法を使用し男に突貫していく。
フリージアだって黙って見ているわけではない。
両手に風の刃を握りしめ、挟みこむようにして攻撃を仕掛けた。

これで、終わる。

命を獲るつもりはないが、腕の一本でも落として『最悪の魔女』との交渉に使えるかもしれない。
彼女たちは、それを躊躇しない。
躊躇するだけの余裕など、どこを探しても無い。どれに、人間は大切なものを守るためには、どんな言いわけやどんな偽善を織り交ぜてでも、どこまでも残酷になれる。
そこで、男は諦めたようなため息をつき、腕をぷらん、とだらしなく垂らした。

「はー。武器で切断できたとしても、それを扱う肉体はそうじゃないのに」

ぐるん、と。
視界があらぬ方向に回転する。そして足首から締め付けられるような痛みが襲う。
きらきらと、月明かりに反射して何かが煌めいているのが見える。それも一本ではなく、見たところ数百はあろうかという本数。

「……糸？」

フリージアがいまだ追いつかない頭で最初に弾きだした言葉だ。
それに答えるように男はこう言った。

「『曲弦師』の『極限糸』ってところかな。まあ、強度はたいしたことないよ。ほんの一〇〇キロぐらいだから」

「これで、俺の仲間を殺したのか」

憎悪に震える声で、宙吊りのまま男を睨みつけるセルヴィ。
男はその言葉にぴくりと反応し、何の気なしに語りかけた。

「いや、僕は冷めてはいるけど冷酷ではないつもりだよ。今はツリーハウス周辺に送りつけて縛ってる。……お母さんが『食べて』なければいいけど」

殺されていないということには安堵したものの、『食べて』という言葉に二人の顔が青ざめる。

「『最悪の魔女』は食人鬼なのかッ！？」

「いや……そっちじゃなくて……その、シモ的な意味……」

「な、なな、ななななっ」

ぱくぱくと口を開閉させながらわなわなと体を震えさせて顔を真っ赤にする。そこには年相応の可愛らしい少女の姿があった。

「ふ、ふ、ふ、ふりゃちにゃっ！！」

「……まあ、落ち着こう。冗談だから」

「ふりゃぁぁぁあああああああああっ！！！！」

ジタバタと暴れるが、頭に血が昇り過ぎたのかプランプランと糸に吊るされて揺れる。

キっ、と歯を食いしばって男を睨みつける。顔が真っ赤なので迫力がまったくないのだが。

男は黙って、空を見上げる。

そして、ため息を深くつくととりあえずといったように、こんな言葉を口にした。

「とりあえず、署まで……ツリーハウスまで来てもらおうか。令状はここに……ないか」

最後まで、冗談な男だった。

第四話：冗談とか（後書き）

『最悪の魔女』多用し過ぎですね。ちょっと自粛……出来るか分からないけど善処します。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

十月十四日。
フリージアの口調と対応を改訂いたしました。
あくまでも『願い』の域を出ないように工夫いたしました。
……ほんの少しですけど。

第五話：大決断とか（前書き）

漸く物語が動き出します。
ではどうぞ。

第五話：大決断とか

「おかえりカゲロウくん。新鮮な男どもをありがとう、お心遣い感謝しちゃう。けど、あたしはカゲロウくん一筋だから、あんな汗塗れ共はどうでもいいのよ」

またもカゲロウをベッドの上に引き倒すと上に覆いかぶさるキーナ。そこから繰り出されるキスの雨を必死に避けるカゲロウ。

いつまでも避けるカゲロウにいじらしくなってきたのか、キーナが、

「よ、よぅし！　少しは出来るようね。な、ならば今度は視覚攻撃（おいろけ）？なのよっ！」

服を突然脱ぎだした。いつも黒いローブを着ているが、その下からでも十分すぎるほどその姿を見せている二つのアレが姿をあらわに、

「させるか」

カゲロウの『曲弦師』の『極限糸』がこれでもかとキーナに襲いかかる。

「いやーん。いけないわカゲロウきゅぅぅん！　服がビリビリ破けちゃうぅぅぅんっ！！」

なんて言いながら、さながら千手観音の如く糸を全て断ち切って

行く。
　その行動にもなんか慣れてきたようで、なんと片手で糸を相手にしだした。その、まさに片手間でローブを脱いでいく。
「うっふっふ～！　やっぱり息子の筆おろしはお母さんの役目よねぇ！」
「くっ、これまでか」
「お母さんの味を楽しんじゃいなさぁいっ！！」
「……話を聞いてもらえないか？」
「ちょっと待って、あとちょっとだから！」
「え、ええ」
　そのあと、十分に渡る攻防が繰り広げられた。
　そして、
「……フリージアちゃんの国の軍門に降らないか？　ですって？」
「……ええ、そうよ。……お願い、できないかしら」
「いやだ、って言ったらどうする？」
　目元をわずかに丸めながら、フリージアを試すような口調で質問する。
「そのときは……」

フリージアの唇が噛みしめられ、手が硬く握られる。
カゲロウの言ったように、彼女には最終手段がある。だが、それを使うことで目の前の女性を軍門に降らせることは、彼女の国の方針に逆らうことになる。自家撞着を繰り返してしまうだろう。
そして、なによりこれが目の前の女性に効くとは思えない。むしろ、こちらが『許容』できずに内側から爆散してしまう可能性だってある。

だけど、それでも、守りたいモノがあるのだから――私は、それらを切り捨てなければ。

「やめておきなさい。『魔封』はあなたの魔力許容量があたしよりも高かった場合に成功するのだから、あたし相手にしても内側から見るも無残に爆散するだけよ。もっとも、あなたがそれを望むのなら止めないけど」

『魔封』とはフリージアの母国、アイゼンハート王国の王族が血脈によって受け継いできた固有魔法。
発動と同時に半径三〇メートルの魔力をその身に吸収し続けるという恐ろしい魔法だ。
しかし、並の人間がこれを発動したとすると（出来ないが、たとえだ）、三秒ともたず爆散する。
急激な魔力の吸収に体が追いついていかないからだ。

だが、アイゼンハートの王族はこれを可能にする。
生まれながらにして魔力許容量が高く、この魔法を成功させることができる。

だが、それも自分の魔力許容量より吸収する魔力の方が少なかっ

た場合のみだ。

「ッ！？」

全て見透かされている。

それもそうだ。相手は魔女。一国の魔術師団一個大隊を相手にしても楽勝できるような相手だ。魔法関連で勝てるという方がおかしい。

それでも、だ。

「……フリージア様。おやめください。貴女が死なれては、もうあの国はどうしようもなくなるでしょう。それこそ、本末転倒です」

「で、でも、」

「……国王様と王妃様、第二王女様がお悲しみになります」

この場の空気の重さに少したじろいでしまうカゲロウ。もうそろそろ頭の許容量が超えるかな？　なんて暢気なことをいつも通り考えていた。

「……わかったわ。……手間をかけて、すまなかったわ……私達、帰国」

「ちょっと待ちなさいよ」

「え？」

その声を上げたのはフリージアでもなくセルヴィでもなく、カゲ

ロウだった。
キーナの言動からみるに、彼女は人間嫌いだ。カゲロウ以外の人間とはあまり関わろうとしない。
だから、こうやって去る者を呼びとめるような真似はしないと思っていた。
「話を聞かないとは、言ってないわよ？　ゆっくりと、話そうじゃない？」
にっこりと笑うキーナ。
その笑みの奥に、何か計画を練っているであろうということは、カゲロウにすら分からないのだった。

◆◆◆

――――蜉蝣様。あやとりって、知ってますか？　こうやって、『糸』を自由自在に使って遊ぶものなんですよ。
――――霞。それぐらい知ってるよ。えっと……ここを、こうだから、あーして、こーして……いらね。
――――クスクス。それじゃあ蜉蝣様。一緒にやってみましょうか。

――――……うん、一緒にやろう、霞。

◆◆◆

「……夢か。脳が入れ替わっているのに、前世の夢を見るって、非科学的だな」

カゲロウはのっそりと自分のベッドから体を起こす。

横を見るとキーナが珍しくまだ寝ていた。涎をだらだら垂らしながら、「あっふぁぁんっ！？　カ、カゲロウきゅんらめぇ！　は、激し過ぎりゅぅ！！！！」　と戯言を喚いている。

何をどうやったらそんな夢を見るのか聞きたいものだ。

なんだかんだでベッドから這い出ようとしたカゲロウだが、力を込めた右手の平に、むにゅっという幸せな感触が伝わる。

なんだなんだ、と思い手の方を見てみると、何でかフリージアが健全な寝息を規則正しく上げながら寝ていた。

右の手の平がナニを握っていたのかは、言わずもがな、である。

「……普通の男だったら発狂してるんだろうなー。いや、狂喜か？

うーん……無気力バンザーイ。脱力系男子バンザーイ」

「お母さんを、お母さんをめたくたにしちぇえええええええええええええええええええええええええええええええええ

えッ……あ、おはよカゲロウくん」

「おはよ母さん」

これぞこの親子のスルースキルである。

「ん」

キーナが目をこすりながらカゲロウの方に手を伸ばしていく。どうやら手を貸してという意味らしい。

カゲロウは仕方がなく手を伸ばすと、そのまま引き倒された。

いつぞやのデジャヴである。

「くふふふふ。あたしの包囲網から突破できるかなカゲロウくぅぅうん？」

「お母さんお母さん。おなか減ったご飯作って」

「きゃいーん！　きゃーわーゆーいー！！　お母さん何でも言うこと聞いちゃうぅん！」

引き倒したカゲロウをその場に残して台所に駆けて行ったキーナ。

そして、またも愛の力による爆撃音が炸裂し始めた。

その音で飛び起きるフリージア。「にゃ、にゃんなのでしゅかこのびゃくげきおんにゃ！？」と舌っ足らずになっているのは中々に来るものがあった。

そしてその爆撃音を聞いてどこからかセルヴィが、「王女様ァ！！」と飛びこんできた。

そこからなんだか、「昨日は、偉そうなことを言ってすみませんでした」やら、「こっちも、頑なになって……」やらシリアスな雰囲気を持ち込まれ、自分の部屋のはずなのに居づらい空気になってしまい、ほぼ強制的に退去させられてしまった。

世の中は世知辛いものだ。

キーナの鼻歌が聞こえるリビングに行くと、机の上に置いてあった『魔法理論の書』を手に取りソファに寝転んでページをパラパラとめくった。

既に知っているモノばかりだったし、今更キーナよりも格下の魔術師が書いた書物を読んでも無意味という奴だ。カゲロウは適当に机の上に本を投げた。

と。そこで爆撃音が唐突に消えた。慣れたものである。

キッチンの方からキーナが浮遊魔法を楽勝で使いながら料理の大皿を何枚も一度に運んできた。王国の宮廷魔術師が見たら卒倒するレベルである。

「ちょっと待っててねー。外で寝てる野郎共にもスープをあげてくるから」

キーナは意外と優しかったりする。

カゲロウも二人を朝食に呼びに行く。二人というのはもちろんフリージアとセルヴィだ。

もしかしてピンク色の雰囲気になっているかもしれないから注意して慎重に覗いてから侵入しようそうしよう、というわけで、何故か自分の部屋に入るために必要以上の精神をすり減らしたカゲロウ。

もちろん、ピンク色の空気なんかにはなっていなかったが、灰色のシリアス空気はいまだ治まっておらず、カゲロウがこらえきれず

に、「朝ご飯食べるなら来て」と侵入するまで痛すぎる空気は続いていたと言う。

そして、四人揃って朝ご飯。

フリージアが、「この肉は？」と聞いてきたのでカゲロウが、「デラリオドラゴン。美味しいでしょ」と答えた。フリージアの顔が真っ青になったのは言うまでも無いだろう。

四人仲良く？　完食し、一息ついて本題について話す。

「で？　お母さん。どうすることにしたの？」

「あたしが行くのは却下。カゲロウくんが行っちゃえ」

……は？

何の気なしに放たれた言葉が何の防御もしていなかったカゲロウに深々と突き刺さった。

「いや、え？　お母さん？」

「可愛い子には旅をさせよ。あたしはこんなところでカゲロウくんを燻らせるつもりはございませんのことよ」

「いや、僕、そう言うの興味ないし」

「本当にそうかしら」

キーナが確信をついたような眼でカゲロウを見つめる。

そんな信念のようなモノが通っている目で見られて、なんの芯も

通っていないカゲロウが耐えられるはずもなく思わず目を逸らす。

「興味ないって言っても、それは興味の対象を知らないだけなんじゃないの？　大雑把にいえば、カゲロウくんは世界を知らない。だから世界に興味が沸かない」

「ち、違うよ」

「違わなくないわカゲロウくん。だってカゲロウくん、その『曲弦師』を習得するのに毎晩ひそかに特訓してたじゃない。それはキミが魔法に興味があるからでしょう？」

「ち、ちが……」

「拒絶するのは簡単よ、カゲロウくん。けど、受領することも、ときには必要なことなの。あたしと違って、カゲロウくんはまだまだ白紙なの。興味を示したモノを書き留めておくスペースはいくらだってあるわよ」

「僕は、お母さんと」

「大丈夫よカゲロウくん。あたしは、いつでもここで待ってるから。辛くなったら、全てを投げ出してここに戻ってきていいから。っていうより、戻って来なかったら怒って国を滅ぼしに出動しちゃうから」

「……うぅ」

どうやら、カゲロウは自分で思っていた以上にマザコンらしかった。それもそのはずだ。前世では親の愛情を受けるべき時に受けら

れず、最後に焦らすかのようにほんの少しの間だけ受けた。
そのほぼ直後。キーナという愛の塊からこれでもかというほど愛を受けている。
手放せるはずなんて、なかった。

「カゲロウくん。キミには絶対素晴らしい世界が待ってる。きっと、いろんな出会いが待ってる。そこには笑いもあるし、涙だってある。まだキミの物語は序章で止まったままよ。だから、そろそろ、第一章を書き綴り始めても、いいんじゃないかな？」

「……うぅぅ」

カゲロウの目にうっすらと涙が浮かぶ。
ただ、俯いたカゲロウの頭を撫でるキーナ。
たしかに、血は繋がっていないかもしれない。だが、この光景をして、誰が『親子』ではないと否定できると言うのだろうか。

ただ、カゲロウは成長するだろう。精神的に。か細かった精神は、これで漸く成熟の時を迎える。

カゲロウは勝手にこぼれてくる涙を我慢せず、こう言った。
それは一世一代。もう、一生に一度あるかないかの大決断だ。

「僕、行くよ。世界に」

親離れ。
それが、一番似合う言葉だ。

そうしてカゲロウは、大人になる。

第五話：大決断とか（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

十月十四日。
問題の『攫い』未遂部分を変更。
フリージアのイメージ変更に伴う、若干の（大分）変化。

第六話：主人公っぽいこととか（前書き）

こっから先は主人公フェイズだ。ベタがお嫌いな人はお戻りくださいってなァ！

すみません。

では、どうぞ。

第六話：主人公っぽいこととか

「魔素充填式魔導二輪。あたしの自作よ」

旅立つ息子に餞別とか言ってキーナが持ってきたのは、黒いフォルムの大型二輪。所謂バイクだった。

前部の開口部から魔素を吸収し、人体構造にのっとり魔力に変換させ、それを動力として走る魔導二輪。この人間は軽く十世代は人類の文明の先を行っているに違いない。

そして、ついに来た別れの時。

「ちゃんといる物は持った？」

「うん」

「本当に？」

「うん」

「じゃあ、さよならのキスは？」

「……うん」

キーナを正面から抱きしめ軽くキスをする。あちらから強引にされることはあっても、こちらから進んでやることはこれが初めてだった。

時間にして、約一分間。
カゲロウは涙をこらえるので必死だった。これでキーナが目の前で泣いてしまえばもうアウトだろう。
しかし彼女はにっこりとほほ笑んでいる。
それが、彼の背中を優しく押してくれた。

「そろそろ、いいか？」

フリージアが言いにくそうに別れを促した。いくらなりふり構っていられない状況だと言っても、彼女だって女王。人の心は痛いほど分かる。分からねば女王になる資格などない。

「……うん」

カゲロウは自らの手でゆっくりとキーナの体から離れた。
キーナもそれに任せてゆっくりと力を抜く。

一生会えないわけではない。
だが、そういった恐怖は際限なく沸き続ける。

だけど、だけど、カゲロウは前に進む。何故かは知らない。巨大過ぎる全体像が掴めていないだけなのかもしれない。
ただ。キーナの言ったように、序章で本一冊を終わらせるのは、やはりいけないのだと、そう思ったかもしれない。

だから、カゲロウはペンを執った。
どんな駄文でもいい。やまなしオチなし意味なしのヤオイでもいい。それがどんなに滑稽で無様で不格好で傑作で戯言だっていい。それを書き綴ることが大衆から見放されるような展開になったっていい。

それで、物語が始まるのなら、安いものだ。

カゲロウはキーナに背を向けた。
キーナはその背中を笑って押してやった。

それだけで、既に物語は始まっていた。
プロットもテンプレートもないような、支離滅裂でヘタクソな物語は始まっていたのだ。

カゲロウはキーナに背中を向けたまま、こう言う。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

カゲロウは魔導二輪に跨り、アクセルを握りしめた。
エンジン部に値する場所がガソリンを使っていないので音はない。
アクセルを全開にした。

バイクはそのまま宙を走る。『極限糸』の束で作った道の上を、時速一〇〇キロほどで一気に走り去る。
その後ろをフリージアたちも追いかけた。

キーナは見えなくなるまで、その後ろ姿を見つめ続けた。

「……いって、らっしゃい……」

頬に伝う温かななにかの名前を、もう自分は忘れてしまった。
だから、無事に帰ってきて、この頬を伝う温かななにかの名前を、賢い息子に聞きたい。

家族に恵まれた『最悪の魔女』。
逃亡中にも決して見せることの無かった、『涙』を、一人流した。

彼女の森に、彼女の嗚咽が、いつまでも響いた。

◆◆◆

「……森の外は街道だったかな」

「そうね」

魔導二輪を走らせるカゲロウの両脇を身体強化の魔法でフリージアとセルヴィの二人が併走する。その後ろに二〇人弱の騎士たちが汗水たらして追ってきていた。
彼らが走るのは透明な糸の上である。幅は一〇メートルほどあり強度もそこらの地面よりはあるが、透明というのが恐怖心を煽っていた。

カゲロウと離れすぎればいくら一〇メートルの幅があるといっても道を外れる危険性があるし、時速六〇キロ程度に落としてくれて

いなければ大変なことになっていただろう。
騎士のスプラッターショーなど見たくもない。
「で？　ようするに僕に何をどうして欲しいわけなの？　そこのところ詳しく聞いてないんだけど」
「戦争への抑止力よ。今この大陸は『大戦』が巻き起こっているの。もう二〇年ほど。もうどの国も戦力はほとんど残っていないはずなのに。どこも敗戦国にならないように戦争をやめないの」
「ようするに大人たちの醜い意地の張り合いの所為ってわけなんだ」
「……そういうことね」
そんなことならば、戦争など初めからやらなければよかったのに。そう思うカゲロウだったが、戦争とはほとんど不可避なものだ。
大なり小なり、戦争は必ず起こってしまう。
長期間か短期間か、大規模か小規模か、その程度の違いしかないのだ。
だから、なるべく短く小規模のうちに戦争は終わらさなければならない。
「アイゼンハート王国ってのは、どういう立ち位置なの？」
「方々で起こる戦争に割って入って、とにかく戦争を早く終わらせるために動いてるわ」
「それって逆効果なんじゃ」

「そうでもないのよ。国際法っていうのがあって、二カ国間にて行われている戦争に第三国が割り込んだら話し合いの場を設けること、っていうのがあるの。無闇に戦場を混沌にさせないためにね。だけど、大体の国はほとんどこれを無視して横から勝ちを奪い去るのが普通らしいけど」

「罰則とかはないのか？」

「というより、その第三国が話し合いの場を設けることを促さなかったら意味のない法だから。そんなの無視して横から勝利を奪い取る方が営利は大きいでしょ？」

「……随分と、お人よしな国なんだね」

「当たり前よ。アイゼンハート王国は永久中立国なんだから。国際法の発案も全てアイゼンハート王国よ」

どうやら、アイゼンハートという国は随分と平和ボケしているらしい。

そんなことをしていたら、すぐに資源などは枯渇してしまうだろうに。

「他国からは攻めてこられないの？」

「永久中立国っていう立場、っていう建前はあるし、守らなかったら他国から糾弾されるのがオチね。けど、最近はそうも言ってられなくなったのだけれど」

「？　どうしたんだ？」

「勢力図の突出が始まりだしたの。最初から力のあった大国が、次々と他の中小国家を吸収合併し始めてね」

「じゃあ、そろそろ戦争は終わるんじゃないか？」

「そうでもないわ。戦略兵器の使用、古代魔法（エンシェントマジック）やそれに付随した古代兵器。失われた魔法（ロストマジック）なんかが乱用されるようになれば世界は終わりね。それらの使用によって大量の魔素が世界中に散らばって、魔素への耐性が低い者は次々と死んで行き、強力な魔物が跋扈する魑魅魍魎、地獄絵図の完成よ」

カゲロウは核戦争を想像した。

魔素が放射線などと同一と考えれば話しは早い。

この世界だって平べったい大地を像などが支えているわけではなく、れっきとした惑星だ。放射線どうこうの前に、一発一発が地形を変質させてしまう破壊を何度も、何十度も使ってしまえば、惑星の形状が大きく変わり、軌道を外れ、恒星に引き寄せられて蒸発という悲劇が起こってしまうだろう。

「それは、何だか嫌だな」

「何だか、ではなく、絶対に嫌だと言ってほしいな」

そんな相槌を打ってくるセルヴィ。堅苦しさの中にも柔らかさがあるといったところか。

「で？　その勢力図が突出してきている国ってのはどのくらいあるんだ？」

「三か国よ。アイゼンハート王国は南に位置しているの。それでウ

ォーム大陸の中央に、アルタイル皇国。北東に魔術国家フレメア。西にフーシャ連邦。こんなところね」

「それぞれの特徴は？」

「アルタイル皇国は武。魔術国家フレメアは魔法。フーシャ連邦は技術かしらね」

一番厄介そうなのは魔術国家フレメアだ。なにせ、あのキーナに冷や汗をかかせるほどの戦力を保有しているのだから。もちろん、古代魔法や失われた魔法を数多く保有していることだろう。

「その三か国とはどのくらいの戦力差があるんだ？」

「一か国ごとに三倍。三か国同時にぶつかってくることはないとは思うけど、もしぶつかってきたのなら十倍はあるわね。単純な兵力差だけでそれだから、古代魔法や古代兵器なんか持ち出されたらすぐに沈むわ」

「じゃあ他国に喧嘩売るような真似しないでよ……」

「仲裁よ。そこは最低限守らなければならない一線なの」

……ニュアンスの違いだろう。そういうことにしておくことにしたらしい。

そんなことを続けていると、森が寸断されている場所が見えた。

「フーシャ―アイゼンハート間の街道よ。デラリオ森林が近くにあるから通るのはかなり難しいけれど、遠回りをする余裕もない商人たちはここを利用するわね」

「じゃあ、街道にそってゆっくり行くとしよっか。後ろの騎士さんたちが今にも倒れそうだし」

後ろを見ると、そんなカゲロウの言葉を待ってましたと言わんばかりにヘルム越しに笑みを浮かべているのが分かる騎士たち。騎士の誇りはどこに行ったのだろうか。

そうして、カゲロウは街道に視線を移す。

こんなとき、ベタな展開として用意されているのは美人奴隷が乗っている馬車が襲われているという温い展開で主人公がなんだかんだ言ってなんだかんだ助けると言う飽和状態の展開なのだが……、

「どうやら、僕の物語はベタから始まるらしいね」

美人が乗っているかどうかは分からないが、三〇名ほどの野盗に襲われている場所がいた。護衛などはいるが、数の暴力で押されているらしく、持って一〇分といったところか。

「どうする王女様」

「助けるに決まっているでしょう」

「……仁徳に従ってもらいたい」

「……、」

なんだか質問しただけでここまで辛辣な言葉を並べられるとか理不尽過ぎる、とかいう感想は口に出さず、代わりに「はいはい」と気の無い言葉を返した。口で勝てるほど口は達者ではない。

「じゃ、先行くよ」

カゲロウは魔導二輪のアクセルを限界まで全開し、一気に空を駆け抜けた。

たまには、主人公っぽいことをしてみるのもいいかもしれない。

◆◆◆

「……こわい、こわいよ」

ボクの家は、凄く貧しかった。

だから、ボクが奴隷として売りに出された。当たり前のことだよ。お金がないんだもん。

貧弱なボクは畑仕事なんかできない。貧弱だから。

だから、そんなボクは家族にとって足手まといだったし、そんなボクを養えるような余裕なんてあるはずもなかったんだよ。考えれば、簡単なことだよ。

ボクは結構高値で売れたってお父さんたちが喜んでいるのを檻の中で聞いたんだよ。

辛かったよ。悲しかったよ。

泣きたくなったけど、泣けなかったよ。

ボクとしてもこれからどうなるかなんて分からない。分からないんだよ。
ボクの骨と皮みたいなカラダに興奮するような貴族の慰み者にされるのがオチなんだろうね。

ボクの夢は、こんなぐちゃぐちゃした世界から『白馬の王子様』が救い出してくれることなんだよ。
ボクは小さい頃にお母さんから聞いたそう言うおとぎ話が好きで好きでたまらなかったんだよ。

だから、助けてほしい。
ボクがおとぎ話に出てくるようなお姫様みたいに綺麗じゃないのは分かってる。
けど、けど……どうしても、望んじゃうんだよ。

だけど、いつまでたっても救ってはくれない。
街から街へ移動するたびに街歩く人たちの曝しものにされた、ほとんど雑巾みたいな布だけで。ずっとつけられてる手錠も、擦れて血が滲んで、それでも綺麗に出来ないから膿んだ。白いような黄色いような膿が、手錠が擦れるたびに破けて痛い。

他の人たちも、おんなじだったよ。
だから、少しだけ活力は沸いたんだ。

だけど、そんな仲間とも言えるような人たちも、どんどん死んで行っちゃうんだよ。
一番残酷だったのは、不衛生から来る疫病で、それに罹ってた人たちを生きたまま焼いちゃうんだ。友だちも、いたよ。

ボクは、いいなって。それを見て、羨ましく思っちゃった。
だって、死んだ方が、楽そうなんだよ。もう、膿が潰れて痛い思いもすることはないんだよ。泣いても喚いても商人の鞭で皮が裂けるまで叩かれることもないんだよ。裸も同然の姿で道具のように人目に曝されることもないんだよ。

死んだ方が、楽じゃないか。

だけど、死ぬのは怖いんだよ。分からない。分からないことが、すごく……。

「……こわ、こわい、こわいんだよ」

外で戦っている護衛の人たちの悲鳴が聞こえるんだよ。
中で怯えているのはボクだけじゃないんだ。他にもいっぱい。
ボク、犯されて殺されちゃうんだ。

もしかしたら、貧相な体には興味がないから、そのまま殺されちゃうかもしれないんだ。

「いやだ、いやだよ。……ひっぐ……王子様……助けてよ」

そんなことを呟いたら、馬車の壁が吹き飛んで仲間の一人が潰れた。
う、うううううううううううううううううううっ！
飛び出た脳味噌を払いのけながら、ボクは隅っこで固まる。
そんなボクを庇うように、ボクより年上の人たちが前に出るんだ。

「トコ。あなたは若いんだから、生きなくちゃ」

そんなことを言った年上のお姉さんが、吹き飛んだ壁の穴から入ってきた山賊に連れて行かれそうになる。

「ひ、あぁ……」

『白馬の王子様』は、こないんだよ。
こない。どれだけ願ったって来ない。

これが……現実？

「な！？　テメェなんだ！？」

「バイクに乗った根暗一号」

……？

なんだか、面白いことを言った人がいるんだよ？　ばいくって、なんだろう？

瞬間。馬車の壁が全部バラバラに裂けたんだよ！？　ついでに檻も！？

薄暗い馬車の中に気持ちの良い太陽の光が差し込んだんだ。

眩しさに負けて目を細めた。
けど、そこには、

『黒い機馬』に乗った、なんだか綺麗な男の人がいたんだ。

第六話：主人公っぽいこととか（後書き）

キーナ戦線離脱につきお色気成分が不足します。
はー。カゲロウとキーナの掛け合いが書けなくなるとか鬱だ、ちのう……。
なんてことは冗談です。

十月十四日。
「キサマは馬鹿か」の部分を変更。
「……仁徳に従ってもらいたい」へ。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第七話：残酷な救いとか（前書き）

今回はちょっと派手にやらかします。
では、どうぞ。

第七話：残酷な救いとか

「えー、今すぐデラリオ森林に潜ってデラリオドラゴンの肉を捕ってくるなら許す。それが出来ないなら大人しくお縄につけー」

優しくも見逃してあげる手段を掲示する心優しい少年カゲロウ。そんな彼の足元には早速伸びた山賊Ａがいる。抵抗するならば滅す。それを体現していた。

「ふ、ふざけんじゃ」

「はいっどーんっ！」

「びぎゅぼッ！？」

指をピンと弾き糸の反動で文句を言った山賊を一〇メートルほど弾き飛ばす。地面を五回ほどバウンドした後、ぴくぴくと痙攣して動かなくなった。

無力化成功である。

「うーん。交渉術は僕にはないらしい。かといって人を殺すのも何だか気が引けるしな」

「ふざけてんじゃねえぞ！！」

そんなありきたりな台詞を叫びながら山賊Ｃがナイフを振り回して突っ込んでくる。

そんな山賊Ｃのナイフを曲弦師の『極限糸』二本で切り刻み、足を払い横合いに吹き飛ばす。今度は面白い悲鳴の一つも上げられな

かったらしい。ギャグ要員失格である。

「ちぇりゃ！！」

「きぃええ！！」

「くらえい！！」

今度は三人まとめて突撃してくる。いくら山賊とはいっても知能は人並みにはあるようで三方向から一斉に襲いかかってきた。

しかし、デラリオマッシュルームの触手と比べると悲しいほど無力だ。

三人の胸に糸を張りつけ、跳躍し各々を激突させる。

跳躍したまま網目状に糸を重ね、糸の状態を粘着質に変化させ、山賊の集団に投げつける。

「な、なんだ！？　粘々すんぞ！？」

わいわいがやがや、なんて幸せな喧騒ではなく、野郎共の野太い悲鳴が耳に響いた。まったくもって耳障りである。

そんな網から逃れた者もいるのか、そこめがけて急降下する。

別に『曲弦師』だけに頼っているわけではない。伊達に六年間、毎日キーナのキャノン砲のごときパンチを受けてはいない。最終的に二千回は超えただろうか。

そこいらの戦闘集団かぶれの統率性のない単発攻撃など、いくら受けても倒れることはない……とは思っているが、痛いので却下である。

「僕が戦いやすいと思うパターン、教えてあげよっか？」

次々に跳びかかってくる山賊を糸ではなく拳で弾き飛ばしながら、一際大きな大男――おそらく頭領――に真っ直ぐ歩み寄る。

「それはね、下手に連携を取ろうとする奴らだよ。今の山賊さんたちみたいに荒削りの連携なんてまさにそう。こんなふうに」

ひょいっと頭を下げると左右から襲いかかってきていた山賊の剣撃がスカ振り、互いの体を切り裂いた。

「自滅を簡単に誘発できるっていうことかな」

「ち、チクショウ！！」

大男は背中にかけてあったハルバードを構える。どうやら、魔導具のようで、魔力が漲っているのがよく分かる。

あれが切断系の魔導具ならば厄介だ。カゲロウの『極限糸』はいくら糸の状態を変化させたところで糸の範疇を超えられない。なので切断系の攻撃にはかなり弱い面があった。

それを抑えるのが『曲弦師』である。剣を受ける面を微妙にずらし、そういった切断の力を分散させる。

それが『曲弦師』である。

まあ、物理攻撃面はそれで対処できるのだが、魔法といった物理現象を超えた攻撃は守備範囲外だ。

「でるァ！」

大男がハルバードを一閃するとその剣閃に雷が走った。どうやら雷属性を付与した魔導具らしい。
これはこれで相性が悪い。
糸を伝って感電する可能性があるからだ。

カゲロウはその一撃を糸で受けることなく、バックステップをとることで回避した。
そんなカゲロウを追撃する大男。どうやらハルバードの扱いには慣れているらしく、縦に振りおろしたかと思えば石突きの点の攻撃が来たり、横に薙いだかと思えばいきなり切り上げる攻撃など多様だ。

「へ、へへへッ！！」

どうやらいい感じに調子が上がってきたようで、段々とカゲロウを追撃するスピードが上昇していく。
それでもキーナのデコピンの方が脅威だと思うのは仕方がないだろう。デコピンといってもその威力侮ることなかれ。最初ふざけて受けたとき二〇メートルほど水平に吹っ飛んだほどである。

それはいいとして、どうやって高圧電流を流し続けるこのハルバード大男、略してハル男を無力化するかなのだが、簡単だった。
ハル男がハルバードを振り抜く前に懐に潜り込み、肘鉄を喰らわせよろめいたところを突き刺すような蹴りで水平方向に一〇メートルほど吹き飛ばした。
鳩尾にクリーンヒット。無差別級王者ＫＡＧＥＲＯＵの誕生である。

とりあえず頭領を倒した。ほっと一息ついたところに、布を裂くような悲鳴が後ろから聞こえた。

「きゃ、キャアアアアアアアアアアアッ！？」

「お、大人しくしねえと、ぶっ殺すぞ！！」

よくある、頭領などを倒すと蜘蛛の子を散らすように逃げて行く子分達の描写。

あれは嘘だ。支えを失った人間がとることといえば、とにかく体に染みついたこと。

信心深い教徒であれば神に祈り、予想を裏切られた読者であれば何度もページを読み返すことだろう。

山賊などであれば、逃亡より、保身だ。

ようするに、人質をとるのである。

「げ、ぎっひゃっひゃ！　大人しくしろよてめェ。いい子にしてれば人間らしく扱ってやる」

「こ、こわ、こわいんだよ」

山賊Ｄに囚われている薄くはなくかなり汚れが付いている少女。髪の色はともすれば黒とも見えるような、しかし日光からの照りつけで深い藍色と見える。そんな髪の毛は肩口で乱雑に切られていて、首元に這う蚯蚓腫れが痛々しい。最初は人懐っこかったであろう瞳も今は活力が失われていて、髪と同じ色の瞳は濁っている。手首にはそんな小柄の少女には似合わない大きな鉄の手錠が鎖でつけられていて、手首は遠目で見ても分かるほど血や膿で滲んでいる。

これが、この『世界』の一部分だ。

「は、はは。お、おい！　そこのオカマ野郎！　てめえも大人しくしてろよ！！」

そう言いながらジリジリと後ろに下がって行く。もちろん、傷だらけの少女にナイフを突き付けたままだ。

そこでカゲロウは疑問に思ったと言う。

大人しくって、どこら辺まで許されるのかな？　と。

「……指をピンってするぐらいは、いいよな。え？　いいよね？」

意味のない自問自答をしながらカゲロウを一〇本の指をフル活動させて、独自の舞台を作り上げていく。

そうしている間もジリジリと後退していく山賊Ｄ。

しかし、舞台は整った。

カゲロウが一〇本の指を握りしめ、そのまま後方に思いっきり引っ張る。

ズドンッ！！　と。山賊Ｄの周りの地面が一気に爆発し、消滅する。一本の柱の上に立つような格好になり、身動きが取れなくなった。

「な！？」

地面の隙間という隙間に糸を忍ばせ、それを運動量が最大限活用できる位置から引き絞る。カゲロウ式地雷の完成である。こんなことをするなら適当に縛り付ければよいものだが、カゲロウは心優しい少年だ。

ゆえに、まだ助かる選択肢を与えようと思っている。

「あーあー。山賊D。聞こえてますか？　今すぐその少女を放しなさーい……。さもなくば、地面と同じ末路をたどらせるぞ蛆虫」

カゲロウは軽く指をはじく。そうすることで糸がビュンっと空気を切り裂き、軽く山賊Dの頬を切り裂く。訳の分からないチカラに攻撃されていると思ったのか、山賊Dは狂ったようにナイフをさらに少女につき立てる。

なるほど。……そっちの選択肢を選ぶ、と？

「な、なにしやぎゃびゃ？」

山賊Dのよく回る舌が消える。あまりの痛みに口を押さえるが、消えた者は再生魔法でもない限り戻せない。

人間というのは、選択肢をよく間違える。

それが、その選択肢を選んだことで、どういった末路をたどるのかなんて微塵も考えずに。

ついっ、と。カゲロウが人指し指を振り下ろすと口を押さえていた両手が消え、代わりに大量の血液が噴き出す。

中指を振り下ろすと右足首が中途から綺麗に切断され体勢が崩れる。

薬指を振り下ろすと左足首が捻じれ、半ば強引に耐性が戻され切断された断面の肉が擦れ激痛が走るのか絶叫を上げる。

小指をくるりと回すと両の耳が弾け飛び、親指と人差し指を合わせると彼の立っていた地面が崩れる。

堕ちて行った山賊の体を千を超える無数の糸が切り刻む。

骨は砂と化し、血液は蒸発する。
文字通り、山賊Ｄの体はこの世に一欠けらも残ることはない。

◆◆◆

カゲロウがわざわざ全員が分かるように山賊Ｄを惨殺したのにはわけがある。
支えを失った人間がいるとする。
そんな人間に手っ取り早く、とにかく短い間だけでも芯を持たせるにはどうすればよいか。
答えは簡単。恐怖支配である。

カゲロウは若干の吐き気を覚えながらもその成果を確信する。
誰一人、恐怖で悲鳴を上げることなく腰を抜かしている。

若干の後ろめたさを覚えながら、カゲロウはクレーターの中央に一本残った柱のような場所に立っている少女を糸でくいっと優しく持ち上げ、とりあえず安全な場所に降ろす。

周囲を見回すが、死体といえば馬車を護送していた護衛の男たちだけだろうか。

「お、おお！　貴様よくやった！　私の専属の護衛にならないか！

？」

「……、」

いつの間にか近くに寄ってきていたゴテゴテと趣味の悪い金ぴか装束に身を包んだ豚。正確にいえば豚とブルドックを足して二で割った男だ。

そんな男が唾を撒き散らしながら、何かを喚いている。

「私の勧めに対して無視とはなんだ！？　ああ！？　私はエルド商会の跡取りであるエルド様の補佐官の下請けの補佐官をやっているムードだぞ！？」

何を言っているのかは理解できない。

ようするに、この男も、底の浅い人間なのだろう。

いや、深い。欲深すぎる。

しかし、これまであって来た人間だって欲は深かった。

だが、何故この男に対しては嫌悪感しか浮かばないのだろうか？

今までの人間だって、自分の目的の為にカゲロウを利用しようとしてきた。それはこんな男とは比べ物にならないほど欲深い。なんせ、戦争を止めようと言うのだから。

そこで気がついた。

この男の欲望は、自分の為だけにしかベクトルが向いていないからだ。

「だから何故無視をすぎゅば！？」

カゲロウは豚男の顔を掴む。
いっそのことこのまま握りつぶしてやろうかとも思えるほど、なにかがカゲロウの中で煮えたぎっていたが、それは自分のキャラではない。
そこら辺に投げ捨てて、こう言った。
「もっとまともな仕事しろ、このクズ」
ついでに豚男のそばの地面を弾き飛ばすと、見事に股間のあたりが黒く滲んだ。
現代風に言うと、『ざまぁ』である。
そんなカゲロウの横に二つの影が降り立つ。
「カゲロウ。って、もう終わったの」
「……終わったよ。なんとも歯切れの悪い終わりだ」
カゲロウは目の前の豚男を切り刻めば歯切れがよくなる終わりになるのだろうと分かっているが、それはダメだ。
今、自分はアイゼンハートの人間として動いている。いつ、どこで、誰が見ているか分からないのに、そんな安易な行動をとったりしたら、ただでさえ立場の低いアイゼンハートが窮地に立たされる。
今から救おうとしているのに、それはダメだ。
「なあ、王女様。この世界って、奴隷ってのは違法じゃないのか？」
「じゃないわ。奴隷というのは、どうしても必要な存在なのよ」

そうだろう。
道具として扱われる奴隷だが、それでも価値はある。人間なのだから。
「けど、この奴隷たちは国の認可を受けていないわね？　なんで、手錠に商業用の紋章が刻み込まれていないのかしら」
「そ、それは」
豚男が脂汗を滲ませながら弁解するべく立ち上がる。
「全部が全部、というわけではないんでしょうけれど……。いるわね、無理矢理連れてきた者が」
「ど、どこにそんな証拠があると言うのだ！　どれもエルド商会の金で買い取った奴隷たちだ！　誰にも文句は言わせんぞ！！」
「じゃあ、この娘たちに聞いてみましょうか」
「な！？」
フリージアが馬車の中で震える奴隷の女性たちに歩み寄る。
カゲロウはもう一度豚男の顔面でも殴ってやろうかと拳を握りしめたとき、服の袖を何者かの小さな手で引かれた。その手は傷だらけで、手首は膿だらけで、とても直視できるものではなかった。
しかし、しっかりとその手を見て、腕を辿り、顔を見つける。
深い藍色の髪をしたカゲロウが助けた少女だった。
「そ、その……ありがとうなんだよ」

声を震わせながらそういう少女。顔も傷だらけで、顔を少しでもゆがめると傷口が開きそうだ。

（現実、か。クソ喰らえだよな、ホント）

カゲロウはそう思う。これぞゲームなどには絶対に描かれることのない負の部分だ。

漫画などでよく見る奴隷少女を助けたその直後の格好なんて小奇麗なものだ。顔などに黒い線が走っているだけなのだから。茶色く汚れた服なんかもまだマシだ。

笑っただけで裂けるような痛みに犯されながら。茶色く汚れた一枚の雑巾のような服には、腐った膿と血の臭いがこびり付いている。カゲロウの肩ぐらいのところにある頭に手を置き、魔力を込める。

使ったことはないが、気持ちだけの治癒魔法だ。

「癒せ、『治癒（ヒール）』」

破けた皮に薄い膜が張る。それは血管でも同じようなことが起きており、軽い再生効果も持った魔法だ。

その魔法をかけながら鎖で繋がれた手錠を見る。紋章のようなものがあれば下手に手は出せないが、そう言ったものはない。国に認可されていない奴隷はただの誘拐と同じである。

糸で手錠を切断し、血まみれの膿まみれの手首にも治癒魔法をかける。

「……なんだか。気が遠くなるな、戦争をやめさせるって」

目の前の、たった数十人の惨劇を見ただけで、ここまで心が揺さぶられている。達観していたつもりの心は、実のところ何も知らなかっただけなのだと言うことを、今、思い知らされた。

「……魔法、なのかな」

魔法を見たことがないのか、興味心で目をキラキラと輝かせている少女。やっと、目に光が宿った。

それを見て、何故かカゲロウの心は安らぐ。

そして、理解した。

これが誰かを救うということなのだと。

「君、名前は？」

何故か知らないが、目の前の少女に強い興味を持ったカゲロウ。

「えっと……トコ。トコって言うんだよ！」

そう言って藍色の少女、トコは無邪気な笑顔を浮かべた。

◆◆◆

「で？　この元奴隷さんたちはどうするの？」

「王国に連れていくわ。そのあとは彼女らの意見を尊重する方向で、国に戻るか決めてもらう」

「……仁徳に従ってもらいたい」

「……、」

デジャヴを禁じえないカゲロウ。

元奴隷の女性たちを連れていくとなると、大分進行ペースは遅くなるし、夜の行軍はできなくなるだろう。

日も傾き始め、今日のところは野営をすることになったらしい。

それを聞いてカゲロウが森の木を切って繋げて、簡易型の住居を三棟ほど作った。

それを見ていた騎士たちが驚きの声と歓声を上げていた。なんだか面白味のある人たちである。

元奴隷用と、騎士団用、あと王女様用である。

カゲロウは適当に木の上で寝ても安全であるし、そっちの方が快適だと言うことでわざわざ家は作らなかった。

カゲロウが適当にデラリオベアを二頭ほど木の上に寝転んだまま仕留め、それが今晩の夕食になるらしい。カゲロウがいなかったらこの人たちはどうやって食料を手に入れるつもりだったのかと疑問に思う。

食事も終えると、セルヴィが、「俺はフリージア様と」などとほざく。

なんだなんだピンク色か？　とカゲロウが問いただそうとしたが、フリージアもやけにあっさり受け入れていた。
なにやら大人の事情があるらしい。

寝る前に元奴隷たちの女性の体を洗おうということになって、フリージアがやけに張りきっていた。それもそうだ。今後、彼女らは王国で身の振り方を考える際、彼女の下で働くという選択肢も考慮しなければならないのだから。

水場は近くにないので、魔法で賄う。
魔法って便利――ウェル＝メルノサの格言から。

黄色い声を上げながら即席ハウスの中で体を洗う女性たち。
それになんだかヘンな妄想を働かせる騎士団（おとこども）。
覗きをしようとした馬鹿からセルヴィの鉄拳制裁が振り下ろされる。

カゲロウはというと、興味がないので木の上で寝転んでいた。もちろん周囲に糸を張り巡らせたまま。

「……はー。人と関わるのって、結構つかれるモノなんだな」

わいわいがやがや騒ぐ方を横目で見ながら、軽くため息をつく。
しかし、だが。
こんなことも、悪くない。
そう思えただけでも、十分な進歩だろう。

色々あり過ぎた今日に幕を閉じるため、カゲロウはゆっくりと目を瞑った。
そして、誰に言うでもなく、

「おやすみ」

静かにそう呟き、眠りに落ちた。

第七話：残酷な救いとか（後書き）

カゲロウくんやりすぎ……。そう思わなくもない一話。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

十月十四日。
「キサマは馬鹿か」の部分を改訂。
「……仁徳に従ってもらいたい」へ。

第八話：あやとり、とか？（前書き）

今回は、小休憩？　とかです。
そんなわけで、第八話。
どうぞ。

第八話：あやとり、とか？

カゲロウはズシンという鈍い音で眼を覚ました。眼を開けた瞬間映るものは枝葉だけで、そんな視界を確保する光源は月光のみである。

デラリオドラゴンの足音にしては小さすぎるが、デラリオベアの足音にしては大き過ぎる。意識が判然としないまま、やむなく体を妙にフィットする木から起こすと、周囲を見回した。

そんなとき、またズシンと鈍い音が耳に入る。

どうやら下から聞こえるらしかった。

魔物が昇ってこようとしているのかと思い、ゆっくりと視線を下に向けた。

魔物にしては小さく、頼りなさ気な体躯。深い藍色は夜の闇にも似て、ほんの少し明けかけている夜空に溶け込んでいた。

昼過ぎに助けた元奴隷の少女か。

たしか、名前は――

「トコ？」

「ひゃわっ！？」

再度トライしようとしていたのか、木の幹に体を張りつけたまま可愛らしい悲鳴を上げた。年齢的には自分と大して変わらないはず

だが、精神年齢はとても幼く見える。まあ、カゲロウは精神年齢三〇代なのだが。

「どうしたの、こんな夜遅くに」

そんなベタ過ぎる問いを無難に選んだカゲロウ。

藍色の少女、トコは体を芋虫のように木の幹に這わせるが、二〇センチも地面から離れるとすぐに背中から落下してしまう。痛みで悲鳴などを上げないのは元奴隷としての生存本能なのか、目尻に浮かぶ涙が月光に照らされることでその姿をカゲロウに認識させた。

「え、えっと。ちゃんとお礼を言いたいんだよ。助けてくれてありがとう、って」

「それはちゃんと言ってもらったから大丈夫。明日は早くなるだろうからもう寝た方がいいよ」

「言いたいんだよ」

カゲロウのススメはなんだか拒絶されたらしく、意思の強い鈴のような声が響いた。

彼は不思議に思いながらもどうすればいいのか分からない。女の子の扱い、というのは今も昔も変わらず難しいモノである。

そんなことを考えていると、再度トライしたトコの体がまったく同じような高さで落下する。一体何度繰り返したのか。傷こそ負ってないものの、それなりの汚れが目立った。

カゲロウは一つ嘆息すると、指をくいっと動かし小さな少女の細すぎる体をひょいっと持ちあげると、「う、わ、わ！　な、なんだ

か纏わりついてくるんだよ！　まるで触手の如く！」と嫌な比喩表現をされた。

そのまま目の前にストンと置くと、面と向かって話す。

もちろん、トコの一方的な会話になるのだが。

「今日は本当にありがとうね！　ちょっと期待は裏切られたけど、すっごく嬉しかったんだ！　それに、とってもカッコよかったんだよ！！」

なんだかカゲロウの預かり知らぬところで少女の期待を裏切ってしまっていたらしいが、実際のところ彼女は満面の笑みを浮かべているので結果的にはよかったのだろう。

ここまで無邪気に笑えたら、とカゲロウは思わなくもないが、こういったことも自分のキャラクターではないだろう。慣れないことはあまりするべきではないはずだ。

「で、でさ。あなたの名前を教えてほしいんだけど……ダメ、かな」

そんなことをぼろっとした服の端をいじりながら聞いてくるトコ。まるで少年のような体つきのトコだったが、こういったところを見せられると女の子であることを認識させられる。

別にもったいぶる必要も無いのでいうことにしたらしい。というより相手の名前を知っているのに相手は自分の名前を知らない、なんてむず痒い状況には元日本人としてはあまり良い心地はしない。

「カゲロウ。カゲロウ＝ヴィオーネっていう名前」

「かげ、かげろう……カゲロウ＝ヴィオーネ！」

どうやら名前を知ることが出来たのが嬉しかったらしく、ニパっと可愛らしい笑みを浮かべた。
カゲロウも少しだけ頬を緩めると、自然と手が頭に向かっていた。誰の手が誰の頭になど、言うも野暮だろう。

「今日は、寝るといい」

指をちょちょいと動かし、再度トコの体を宙に浮かせた。これを行っているのがカゲロウだということをトコも分かったのかジタバタとは暴れない。ただ、頭から手が離れた瞬間、「あっ……」と惜しそうな声を漏らしていた。そのことにカゲロウは気付いていない。

「わ、わわわ！　分かったんだよ！　じゃ、おやすみ！」

「おやすみ」

ヒュンっ！　と、風を切りながらトコの体が一瞬で加速し、即席ハウスの入口の前でふわりと羽のようにゆっくりと舞い降りた。
体をくるりと回転させると、ぶんぶんと手を振ってきた、カゲロウもそれに小さく胸の前で手を振ると、彼女は名残惜しそうに家の中へと入って行った。

カゲロウは人との接触にあまり慣れてはいない。というより、心が触れ合うことに慣れていないと言った方が正しいかもしれない。
前世での一六年間の人間関係の経験はほぼ表面上の関係であったし、唯一とも言えるその相手は体感時間で二〇年ほど前に亡くなっている。

キーナ以外の人間とはこの世界で触れあったことすらなかったの

だ。無理もない。キーナの場合は遠慮がなさすぎるお陰で気負う必要はどこにもなかったのがよかったらしく、まったくもって疲れなかった。

彼は少しだけ息を吐くと、『極限糸』で輪を作り、思考錯誤をしながら色々な形を編み出していく。

吊り橋や、川、ほうき星など、ポピュラーなものはすべて網羅している。

それらを何かを思い出すようにして作り、そしてまた変えてゆく。

最後に、二人居なければ出来ない技にさしかかった時、少しだけ頬を緩めた。

そして、ゆっくりと眼を閉じ、糸を消した。

これを一緒にやってくれた彼女は、もういないのだから。

第八話：あやとり、とか？（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第九話：貧乳はステータスとか！　ではなく、入国とか（前書き）

漸く入国ですね。
では、どうぞ。

第九話：貧乳はステータスとか！　ではなく、入国とか

朝早くから王国へ出発したカゲロウたち。その行軍は遅々としている。

元奴隷女性たちの所為、というわけではないが、つまるところ彼女たちの足に合わせているといったところだ。

「カゲロウさん！　凄く速いんだよぉぉ！」

「まあ、うん。っていうか、なんでこうなってんの？」

歩きながら、カゲロウたちの上空でトコがヒュヒュヒュヒュヒュと高速で移動している。もちろん、彼女が魔法を使っているわけではない。

トコがあまりにも、「暇なんだよ暇なんだよカゲロウさん遊んで遊んで」とせがんでくるので、カゲロウが仕方がなく『極限糸』を使い、上空に三六〇度トランポリンを形成しているのだ。

使用本数はトコの安全も考えて二千本ほど。千切れない限り使った魔力の八割は返還吸収できるので、実際には四〇〇本程度である。

この本数を対人戦闘に使えば、四〇〇の死体が出来上がるのだが、それはまあ、言ったところで意味のないことだ。

「速い速い速い速い速い速い速い速いはや、い……はや、……おえ。酔って来たんだよ」

まさかの吐瀉物の雨イベントのフラグである。急激に止めず、ゆっくりと減速させていく。急に止めた方が体への負担が凄まじい。
やがてゆっくりと地面に下ろされるとカゲロウの背中にしなだれかかってきた。

「カゲロウさん、おねむなんだよ。その黒い機馬にのせて」

「重いから却下って言ったらどうする？」

「ボクは結構軽いんだよ！　ほら、胸とかないし！」

「自分で言ってて悲しくならないか？」

「貧乳はステータスって、お姉さんたちが言ってたんだ！　カゲロウさんは巨乳好き？」

「見た目は、気にしないよ」

「……勝てる、勝てるんだよ。この調子でいけば、どんなスタイルがいい人が来ようとも、一緒にいた時間の長さで、勝つる！」

そういうと嬉々として魔導二輪に跨ったトコ。魔導二輪の巨躯を押して歩いているカゲロウとしては少しでも重量を軽くしたいと思うわけだが、トコが乗ったところで大して重さは変わらなかった。
貧乳はステータス。
カゲロウはこの言葉の意味を大きく勘違いしている。

（身軽だから、ステータスになるのかな？　たしかに、動くたびに脂肪の塊が胸元で揺れ動くのは邪魔だな……でも、お母さんは全く気にしていなかったし、うーん）

「ねえ、フリージア。君はどう思う？」

「何がよ」

「貧乳はステータスっていう言葉」

「……そんなに真剣に悩まれて、さらに真剣に質問されても答えにくいのだけれど」

「フリージア様を困らせるな。そして、不埒なことを言うな」

「じゃあ、セルヴィはどう思う？」

「……うるさい」

まともに取り合ってくれなかった。若干空しさが残るカゲロウだったが、まあそれならそれでいい。

魔導二輪の黒い車体の上で、トコは気持ちよさそうに寝息を漏らしはじめた。

◆◆◆

「それにしても、綺麗な黒髪ね」

唐突にそんなことを言ってきたフリージア。どこがだろうかというカゲロウの疑問に対しフリージアは呆れたような表情を見せたが、あの森の中にいたのなら無理もないと納得したようだった。

「この世界に黒髪の人間はほとんどいないわ。全体の一割の一割の一割にも及ばないぐらい少ないの」

「フリージアの白金髪（プラチナブロンド）だって綺麗じゃないか。珍しさどうこうより、そっちの方がいいと思うけどね」

「お褒めの言葉ありがとう。けど、希少性というのは美醜を乗り越えるものなのよね。私の妹も黒髪黒目だけど、あなたほど綺麗じゃないわ。けど、そんな妹でも、結婚相手が腐るほど出てくるの。ホント忌々しいわ、妹に纏わりつく蠅共め……」

いきなりフリージアが黒いオーラを噴き出しはじめ毒舌になった。妹煩悩（シスターコンプレックス）、そんな言葉がすぐ思い浮かんだ。

そんなフリージアだったがセルヴィの冷静な、「落ち着きください。深呼吸です」と御しに従って冷静になって行った。

いい主従関係だったと思ったが、やはり従うものはいつも苦労するらしい。カゲロウはセルヴィの為に心の中で祈ったそうな。

そのとき、茂みがガサガサとざわめいた。一気に臨戦態勢に入る騎士団の連中。

だが、カゲロウが指をくいっと動かすとその正体があらわになる。

「ただのデラリオラビットだよ。頭に生えてる角に魔力を込めて突き刺してくる程度の奴だから、そんなに警戒しないでいいよ。もし刺されたとしても骨が折れるくらいだから」

「結構強いじゃないのよ！」

「けど、可愛いじゃないか。僕は殺したくないね。それに、こちらから襲わなければ至って温厚な性格だ。こんないたいけな魔物を殺すスキモノがこの中にいるっていうのなら話は別だけど」

「うっ……」

スーパーヘリクツタイム。とにかく屁みたいな理屈を並べまくり、面倒事を遠ざけるカゲロウの得意技。消費ＫＰ（カゲロウポイント）は五ポイント。燃費がいいのでカゲロウは多用する。

ＫＰとは！　カゲロウが行動を起こすのに必要なポイントのことで、カゲロウは千ポイント持っているんだ！

キーナのキスをかわすのはゼロポイント！　行動とすら思っていないほど日常化しているらしい！

以上、キーナがつけたカゲロウの自己満足設定資料。

キーナの妄想によって仕上がっているので、この設定はフィクションであり、実在の人物・団体・事件などは一切関係ないのだ。

「ほら、抱っことかもできたりする」

指をくいっと動かすとデラリオラビットの体がふわりと浮きあがり、ひゅんっとカゲロウの腕の中に収まった。

純白の体毛に覆われていて、紅い瞳が涙で滲み、体はプルプルと震えている。

「可愛い、だと……？」

「あ、でも」

「キュイ！」

フリージアが手を伸ばした瞬間にカゲロウの腕の中から逃げてしまった。そして恐るべき速さで茂みへと突き進んでいく。

「すごく臆病だから、すぐ逃げてしまうんだ」

「……確信犯よね」

「もちろんだとも」

こんなやり取りをしている二人の後ろで、とある『聖騎士』が肩をわなわな震わせていることなんて露ほども知らなかった。

◆◆◆

三日後。漸く見えてきたアイゼンハート王国。二日前には伝令兵として騎士数名が先に王国へ報告をしに行った。すでに王国には伝わっていることだろう。

漸くというより、すでにアイゼンハート領内だったようだが、デラリオ森林近郊には居住区などは一切ない所為でやけに小さく感じ

る。
理由は簡単。魔物が頻繁に出てくるからである。
「それが逆に強固な自然の要塞になってるってわけなのかな」
カゲロウとしては大した実感もわかない。あの森最強のデラリオドラゴンでさえ、余裕とはいかないものの互角には渡り合える。その他の魔物については楽勝レベルだ。
「なってるのよ。とにかく、そこら辺の要塞とは比べ物にならないぐらい」
「交通網とかは？　資源のやり取りができなくちゃ、国として成り立たないんじゃないの？」
「別にこの街道だけが交通網ってわけじゃないわよ」
「というより、普通なら要塞だとか防衛だとか考えなくてもいいような国だ。永久中立国なのでな」
「ああ、そっか」
『大戦』で忘れがちだが、アイゼンハート王国は永久中立国。平和を望み、戦争での利益は一切得られないような活動を行っている。
どれもこれも、ほとんど意味を成さないような定義だが。
大きな門が見える。あの門の向こうに、これから自分が守るべき国の形が待っている。
どんな国なのか。
どんな人なのか。

どんな心なのか。
まずは、それを見極めなければならないだろう。なんせ、カゲロウはあの『最悪の魔女』の代わりとしてこの国に召集されているのだから。

門に近づくにつれ、人通りが多くなる。
王女御一行だということに気がつくと、周りを進んでいた行商人などが一歩引きさがり一礼していく。
そんな様子に門の前で検問を行っている門兵が気付き、がしゃがしゃと鎧を鳴らしながら近づき、セルヴィと確認を取り合う。
そのうちの一人が声を張り上げると、門がゆっくりと開きだす。
ズズズズズズズ、と。
カラクリ仕掛けの鉄の門がゆっくりと開いた。

フリージアとセルヴィはその門の前でカゲロウの方を振り返り、仰々しくも無く、飾り立ても無い言い方をした。

「ようこそ。平和を愛する国、アイゼンハート王国へ」

フリージアの白金髪（プラチナブロンド）の髪が、ゆるやかな風になびき、同じ色をした瞳は柔らかく丸められる。

門の向こう側では、大地を揺るがす轟音を放ち、カゲロウを迎え入れる歓声が響き渡っていた。
ちょっぴり、気恥ずかしく感じてしまう、十六歳男子がそこにはいたという。

第九話：貧乳はステータスとか！　ではなく、入国とか（後書き）

トコ、天然キャラなのか計算高いキャラなのかよく分からない。
そして新ジャンル。天然で計算高い系女子の誕生。

ではなく、はい。この小説、自分で書いてても思ったんですが物凄くスローペースですね。森から出発して王国に入るまでに三話も使ってしまいました。

まあ、一話あたりの文量がどうしても増えないからこれぐらいがちょうどいいんでしょうけどね……。

ネガティヴ禁止！　ポジティヴ促進法を発令する！

では、

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

読んで下さりありがとうございました。

第十話：おっとり王家とか（一人除く）（前書き）

遅れました。
いつもどおりゆったり展開です。

第十話：おっとり王家とか（一人除く）

アイゼンハート王国、王都リバレイズ。
そこにある王宮を帰還した王女一団が歩いていた。といっても、騎士団の男たちはセルヴィの、「家族に、会ってこい。死者の親族へは、俺が行く」との命令によって方々へと散らばって行った。
元奴隷の人たちはフリージアの命で、「私の宮の広い場所に休ませておいてあげて」と侍女に言ったので、全員がそれについて行く、はずだったのだが、

「カゲロウさん、王宮ってドキドキするとこなんだね。あ、とこっていうのはボクの名前とかけたわけじゃなくて――」

カゲロウの小脇にしっかりとしがみつく形でトコが落ち着かない様子で話しかけていた。
侍女数名が連れて行こうとしたのだが、トコが『や、やだ！　い、一緒に行くんだよ！！』と喚き、フリージア含め侍女すらも困り顔にさせた。そこでカゲロウが『まあ、いいんじゃない？』と寛大な決定を下し、何故かこの形になった。

「トコ。もう少し離れてくれないと非常に歩きにくい」

「ボクは、こっちのほうがいいなー。（城仕えの仕用人たちにボクとカゲロウさんの間には割って入れないってことを見せびらかしてやるんだ）ふふふー」

「？」

不気味なのか可愛らしいのか分からない笑みを浮かべるトコに疑問符を出しながら、カゲロウは仕方がないと言った様子で前を向いて歩きだした。

王宮内は綺麗な大理石が加工された、どこか温かみのある感じを受ける造りになっていた。

コツンコツン、と。歩くたびに大きな廊下に足音が響く。しかし、それにしては少し音が大きい。

廊下の隅々をくまなく観察してみると、小さな魔法陣が所々に配置されていた。

（……術式構成からして音量増大系か？　……なるほど、足音を広く拡散させてエコー代わりにして歩く人間の形を認識する魔術もどこかに施してるのか。結構厳重な警備態勢だな）

前世の知識を応用しながら初見でこの王宮の警備術式の仕組みを見破ったカゲロウ。この程度、キーナの『設置式魔術を見破ろう☆応用編』に比べればなんでもない子供の遊びと同義だ。間違えればもれなく爆発するのだ。半径一〇〇メートルほどが。

（……今思っても、お母さんのしごき方は異常だ）

昔の思い出を苦々しい表情で思い出していると、トコが下から覗くような形で、

「気分が悪いの？　大丈夫？」

「大丈夫だよ、ちょっと苦い思い出を思い出しただけだから」

「……思い出」

なんだか神妙な面持ちとなったトコを今度はカゲロウが心配する形となった。しかし、すぐに顔を上げるとこの数日間で嫌というほど（嫌にはならない。比喩表現だ）見せられた笑顔を向けてくる。

「そろそろ玉座の間よ。少しは飄々とした態度を整えてね」

「お母さんと比べるとこれでもかなりマシだと思うけど」

「……窮屈じゃない程度でいいわよ、もぅ」

可愛らしい唸り声を上げた後、玉座の間の扉と思われるところに立つ守衛にフリージアが話しかける。今まで気軽く接してきたが、こう見てみると本物の王女なんだという実感が少しだけ沸く。

守衛がきょどきょどしくフリージアを応対する。

しかし、すぐに話はついたようで、扉を開ける動作に入った。どうやら中には既に王と王妃がいるらしい。

だが、カゲロウの心はあまり揺さぶられない。そういう大物との会談は既に慣れている。

こういった場合、あまり下手に出ると自分の有用性を相手に疑わせる形となり、結果、これから協力していくというのに大した信頼関係は築けないだろう。疑心が鬼を生み出すに違いない。

最悪、命を狙われる可能性も無きしにも非ずだ。

「入るわよ」

入るのは、フリージアを先頭にして、その後ろにカゲロウとトコ。その後ろをセルヴィが挟む形で入室することとなった。
扉を開けると同時に、「失礼します、お父様、お母様」とフリージアが凛とした声で告げ、部屋の奥から「ああ」という言葉が帰ってきた。

中にはレッドカーペットが玉座まで敷かれており、踏むことすら躊躇われるほど毛が立っている。これも慣れたものなのでガスガスと踏んでいくが、トコは新鮮らしく、「ほわ〜」と感嘆の声を漏らしていた。

玉座には、まだ年若い男性と女性が座っていた。まだ三〇代も半ばと言ったところか。
それもそうだ。この世界での成熟とは一五歳から一七歳ほどなのだから。ということはカゲロウもトコも十分成人だと言える。本人たちに自覚は無いのだが。

「フリージア、お帰り」

男性から柔和な言葉と笑みが向けられる。

「ただいま戻りました」

それに王女然とした態度で受け答えするフリージア。その後ろでセルヴィが浅く礼をしていた。

「それで、後ろのお二人は？」

今度は隣にいた女性からカゲロウとトコに対して言葉がかけられる。

カゲロウはどきりとも動揺しなかったが、トコが、「え、え、えっと」と分かりやすい動揺を示した。どうやら二人は正反対らしい。

「キーナ＝ヴィオーネの愚息のカゲロウ＝ヴィオーネです」

「なんと」

「まあ」

二人とも似たり寄ったりな反応を示す。一様に驚きと言う表情が見て取れた。

それもそうかもしれない。『最悪の魔女』に息子がいたという話なんて聞いたことが無いだろうから（キーナが来たら来たで驚くだろうが）。

けど、少し気の抜けた声過ぎるような気もする。後ろに感嘆符すらついていなかったような気がする。そんな気がしてならないカゲロウだった。

「お父様、お母様。これで、世界に希望が見出せるかもしれません。この御仁は見た目こそすれ少し貧弱にお見えになるかもしれませんが、私と騎士団長を軽く一蹴して見せました。それに、デラリオ森林の中でも平然と暮らしていたことから十分見込みがあります」

「……、」

若干けなされた気がしてならないカゲロウ。どう考えても貧弱という言葉は不必要だったような気がしないでもない。しかしそれをここで言うわけにもいかず憮然とした表情を少しだけ綻ばせる。愛想笑いという奴だ。

「ほう。なんというか、凄いお方がやって来られた」
「ええ。なんだか、わたくしたちには程遠い世界の人がやって来ましたわ」
二人ともフリージアに似て、いやこの場合は逆でフリージアがこの二人に似ているのだろう。とにかく、白金髪が似合う美人な笑顔だ。
温和な部分はほとんど受け継がれなかったようだが。それだけは惜しいものがある。
「……っていうか、え？　王様とかに命令されてきたんじゃ？」
そう。二人の口ぶりからして、二人はこのことをほとんど知らなかったといってもいい。フリージアの口ぶりからするとこの二人に命令されてきましたよ、という雰囲気だったのだが。
「違うわ。私とセルヴィがお父様とお母様に進言して、二人もよく分からないまま了承してくれたの」
「……」
『うっわアバウト』という言葉が喉まで出かけたのだが流石に言うのは憚られた。
それにしても、この国はそんなことで大丈夫なのだろうか。永久中立国だからといって、こんなことでは魔物からの侵攻すら防げないような気がしないでもない。
「大丈夫よ。二人とも政治の手腕は凄いのだから。軍事関係はあまり口を出されない方々なのよ。その代わりに、私とセルヴィ、あと

大将軍その他諸々の人たちがそっちの方面はカバーしてるわ」

小説とかにある『王室派』と『騎士派』とかの確執なんかはあまりないようだ。いや、それすらも上辺だけという可能性があるが。

「カゲロウ殿。このたびは我が国の応援要請にこたえていただき誠に感謝いたします。長旅でお疲れでしょう。お部屋は娘に言われて用意しているので、そこでじっくりお休みください。今夜はパーティーでも開きましょう」

「ふふ。あなた、楽しそうね」

「ああ。家族が出来たような気分だよ」

「……、」

本当に大丈夫なのだろうか？

本気で心配するカゲロウだった。

第十話：おっとり王家とか（一人除く）（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十一話：夢、とか（前書き）

トコさんのイメージをトコトコ変えてみようプロジェクト第一弾。

『しつこいんじゃなくて、健気なんだよ』

嘘です。

第十一話：夢、とか

「トコ……なんで、僕と同じ部屋？」

「……イヤ？　ボクじゃ、満足できないかな？」

「いや、僕は見た目は気にしないけど……そういうことではなくて、っというよりどういうニュアンスを含んだ言葉だったのか教えてもらいたいのだけれども」

「……いやん、なんだよ」

「……いやん、じゃないし」

あれから侍女の人に自室へと案内してもらった二人。侍女のお名前はフアというらしい。乳白色の髪が特徴（チャームポイント）の女性だ。

部屋の広さは広い、否、広すぎると言っていいだろう。一〇人が一緒に寝泊まりしたとしても十分に余裕があるぐらいに広い。

……だとしても、だ。

今度こそはカゲロウからトコを引き剥がそうと奮闘したフアだったが、『イーヤーダー！』と喚き散らかされる始末。困り果てるフア。助けを求めるフアの静かな視線。

しかし、ここでまたカゲロウが助け舟を出すわけにもいかなかっ

た。たしかに、トコの身体は少年のようだが一応女性だ。それも世間一般から見れば普通に成人の。

ここでカゲロウは弁解しなければならない。『別に興味は無いけど』と。

恥ずかしがって言っているわけではないので本気だ。

そこでフアが、『……お任せします、カゲロウ様』と言って踵を返して逃げ去ってしまった。

ここで、口下手なカゲロウが駄々をこねているガキを言いくるめることができるはずもないし、トコを一人で王宮内を歩かせるわけにもいかない。

だから、部屋に入れた。

だが、もう一度問いただしたくなり、冒頭へと続くのだった。

「……僕がソファ、トコはベッド」

指をソファからベッドに移して仕方がなさそうに言うカゲロウ。それでもふっかふっかのソファなので狭い（そうは言っても普通よりは大きい）のを我慢すれば快適なものだろう。

とりあえずの紳士としてのマナーは分かっているつもりのカゲロウだ。

しかし、思い誤っていた。トコの……実力をッ！！

「ベッド広いんだから、一緒に寝ればいいんだよ」

「……まだパーティーまで時間があるからゆっくり話し合おう。性急に事を運ぶ必要はないとも」

若干表情が消えたカゲロウ。どうやらこれは拙いらしい。
するとトコは口元に手を当てて、
「……ふふ。冗談なんだよ。ボクがソファで寝るから、カゲロウさんはベッドで寝ればいいんだよ」
「いや、それは憚られる。……やっぱり、フアさんに頼もう」
「ふふ。……けど、カゲロウさんと一緒にいたいな」
「？」
どうして、何故、こうも自分に拘ってくるのか疑問を抱いたカゲロウ。
今思えばそうだった。トコはずっとカゲロウの横を離れなかったではないか。離れたとしてもそれは寝るときだけで、大体は彼の隣に立っていたのだ。時々昼寝をしていたのは置いておくとして。
だから、隠さず質問する。
「どうしてトコは僕に拘るんだい？」
「……、」
その質問に対してトコは顔を少しだけ俯かせた。しかし、落ち込んでいるわけではなく、何かに思いを巡らしているような、そんな雰囲気だ。
少しだけしんみりとするような、そんな沈黙の後、ゆっくりと口を動かし始める。

「カゲロウさんは、ボクの『夢』なんだ。一四年間、ずっと捨てられなかった……」

「……『夢』」

就寝時に脳内で起こる生理現象のことではないということは分かった。

もう片方の将来に希望を持つ方の夢だということも分かった。

だが、具体的には分からない。

（……『夢』、か）

見たことが、ない……ような気がする。

そう静かに心の中で呟いた。

あの世界でも、この世界でも、『夢』見る少年はどこにもいなかった……ような気がする。

どれだけ、どれほど、どんなに探ろうとも――――そして、分かった。

一つだけ、一回だけ、一度だけ、『夢』見る少年がそこにはいたはずだ。

それは――幸せ、だ。

恋とも、愛とも言うのかもしれないが。

「どんな夢？」

だから、知りたくなったのかもしれない。彼女の夢を。

すると、トコは少しだけ気恥かしそうに顔を赤らめ、頬をぽりぽ

りと掻く。そして、またゆっくりと話しだした。

「……『白馬の王子様』って、分かる？」

「……うん」

よくある話だ。

悲劇のヒロインが、白い馬に乗った王子様にこの状況から救い出してくれることを一心に願う。

「ボクにとっての王子様は、カゲロウさんなんだよ……」

「……トコ」

「一〇歳のとき、奴隷として売られてからずっと、いや、多分、家に居心地が悪いと感じるようになってからずっと、ずっとなんだ。毎日が、辛かった。一度だけ。本当に一度だけ死のうと思ったりした」

静かに物思いに耽りながら、それでも自然と口から零れ落ちるように。

「……けど、それって『夢』を諦めることだから。お母さんに聞かされて、物心ついたときからずっと思い続けてた『夢』だから。……ふふ、偉いでしょ？　ちゃんと、生きてるんだよ」

手首に残る、いまだ生々しい傷跡を懐かしむように擦りながら。少しだけ目を細めて。

「……ああ、偉いよ」

『夢』とは偉大だ。人の生死すらこうやって分けてしまう。
しかし、そこで死を選ばなかった人間こそが、一番偉いのだろう。
どうしようもない、逃れようもない状況でこそ、人間は試され、その真価を見せる。

「だから、なんだ。迷惑かもしれないけど、つい、拘っちゃうんだよ……」

そこで、恥ずかしさで顔を赤らめながら、くりくりとした瞳を細めて、にっこりと笑った。
自分に会えて、心底、幸せそうに。
叶った夢、そうそう捨てられるものではないだろう。

……どうやら、今回はカゲロウが折れる番のようだ。

「分かったよ、トコ。今回は一緒でいいよ」

「……イッエーイ！！　拍手喝采、大☆勝★利！！」

「……、」

ベッドの上で飛び跳ねながらVサインをカゲロウに向けるトコ。

シリアスな雰囲気が一瞬で吹き飛ぶのを感じる。
これこそ『強さ』に類するものだとは、当事者自身ですら、分かり得ないのだった。

◆◆◆

――ほら、これが亀です。

――……むう、できない。

――フフ。東京タワーです。

――……のー。

――箒ですよ。

――……なん、だと。

――……フフ。簡単なのから、やりましょうか。

――……うん。

◆◆◆

「キ、キレイな服なんだよ」

ドレスルームから引っ張り出したのだろう。少し古めかしいが十分綺麗なブルードレスを纏ったトコ。多分、元奴隷の女性たちもパーティーに参加するのだろう。

カゲロウはというと、

「……キレイです、カゲロウ様」

「……、」

ドレスアップや身だしなみを整えてくれたフアの言葉だった。褒め言葉だろう。見惚れていたあたりから、そう判断できる。

褒め言葉がこれほど嫌だったことは今までにない。

濡れたようにしとやかな髪がフアのプロの技術によって人知を超え、それが雪のように白い肌と相まって神々しささえ感じさせる。

……ようするに、男と女の境界線を見た目だけ超越したということだ。

「……カゲロウさん、お嫁さんに来てください」

それがまた胸を深く抉った。

美人系男子。聞こえはいいが、ようするにオカマ顔である。他人から見れば羨ましく思うかもしれないが、本人からすれば短所にしかならない。

人間とは、不都合な生き物だ。

「……チークを塗ったのは、どういう了見ですか？」

「あ……つい」

いつの間にやら本格的な化粧も始められてしまった。
しかし、パーティーまであまり時間が無いので……このままでいるしかない。
そう考えただけで憂鬱だった。

「……のー」

「す、すみませんでしたっ！」

「……いいよ、うん。僕の顔が悪いから。……どうせ女顔ですよ」

「ひっ」

やはり、この顔のことで昔嫌な思い出があるらしい。
額に黒い線を浮かび上がらせ、まるで呪詛のようにぶつぶつブツブツぶちぶちブチブチ呟き始めたカゲロウ。
その様子に若干引く女子二人。
しかし、その後すぐに平静を取り戻すことに成功したカゲロウ。
だが、その表情（かお）には『諦』の一文字が浮かび上がっていた。

本当に――――先行きが思いやられる。

第十一話：夢、とか（後書き）

今回もゆっくり進行。
自分でもびっくりするほどゆっくりしてます。
自分の中ではここで大規模戦闘に突入していたのですが……自分の妄想を文章にしたら、こうなりました。

全ては自分の経験不足からなるものです。もしくは、才能が無いと言いますか。

それでも見てくださるかた、ありがとうございます。
なんだか自分でも怖くなるほど評価され始めた作品ですが、力の続く限り書いていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十二話：薄幸の第二王女とか（前書き）

今回は会話文が多量です。
……いつもな気がしてならないですが。
では、どうぞ。

第十二話：薄幸の第二王女とか

どうやら、この国は自由度が高い。悪く言えば平和ボケ、よく言うなら平和。

フリージアがあのぐらいの性格でやっとのことこの国が成り立っている、ぐらいこの国は平和を甘受しているのだろう。

警備体制は、魔法的警備体制は万全といってもいいが、それ以外は普通だ。

もしかしたら、カゲロウの感覚がおかしいだけなのかもしれないが。

立食パーティー。

嫌な出来事しかなかった場所だ。というより、嫌なことが起きると分かっていても、行かなければならなかった場所だ。

だから、盛大にため息をつきながら入場しよう。

◆◆◆

「お前は無理しなくていいわよ？　今日は調子が悪そうだし」

とある一室から凛とした声が廊下に零れ落ちた。強かでありながら、どこか芯が安定していないようなそんな声だ。

しかし、それよりももっと弱々しい声で、

「大丈夫ですよ、お姉様……ゲフガフッ！？」

「センセェッ！　妹が、イモウトがあああああああああああああああああッ！！」

「ゲフ……大丈夫です。いつも、ですから」

「吐血！　ダメ。ゼッタイ！」

「私も、そのカゲロウ様とやらに会いたいのですが……」

「血を口の端からこぼしながら何を言っているの！？　今日はゆっくりしておきなさい」

「ケチですよ、お姉様」

「ケチではないぞ？　お、お姉ちゃんはね？　お前の為にと思っていろいろ心配しているのよ。大体あんな腹黒い人間が腹黒いことを考えて腹黒いことしかないような場所にお前をやれるか。セルヴィがいるから安心だとは思うが、決して警備体制は万全ではない。もし、お前の身に何かあれば……」

「私の命は、どうせ長くはありません。先生からも、保(も)って一年と宣告されました」

掻き消えるような声。それは老化との壁に遮られてしまうほどか細いものだった。

「そんなことはないわ！　絶対、絶対お姉ちゃんが助けてみせるから」

声が震えているのが壁越しでも分かるほどに、大きく、そして儚げな声だ。

「ムリ、ですよ。これは不治の病ではないですけど、その特効薬を作る材料が――」

「そんなこと、お父様に申し出れば」

「それこそ、むりです。お姉様が一番現状を理解しておられるでしょう？　だからこその、『最悪の魔女』の協力を仰ぎにあの森に行かれたのですし。三列強といつ戦争に突入するか分からないのに、私一人のためにそんな財力と戦力を割けるわけありません」

「そ、そんなこと」

「あるのです、お姉様」

フリージアとは違って、こちらの声には確かな芯が感じられた。だが、芯はあるのに、どこか弱々しかった。

「麒麟の天角。とても高い知能と戦闘力を誇る、神獣キリンの角。水と雷を操るその姿はまさに神。大気中のごくわずかな水分ですら操り、その雷の命中精度は百発百中とも噂されます――――そんな

怪物の角なんて、取ろうとするだけでどれだけの命が失われるでしょう……。私は、それほどの命をかけられてまで、生きていくことはできません……」

よく通る声だ。まるで、フリージアの胸をそのまま貫いて行くかのような。

「――くそッ」

「泣かないでください。これからパーティーなのでしょう？　せっかく侍女長さんがしてくださったお化粧が落ちてしまいます。それに、今日はお姉様の言った通り安静にしていますから」

「……私は、諦めないぞ。絶対に」

コツコツコツ、と。廊下に続くドアへ歩いて行ってしまった。

そして、ほんの少しの間だけ立ち止まると、振り返りもせずにドアを開けて部屋を去ってしまった。

一人残された少女は、しばらくドアを見つめた後、視線をおとした。

そこには、輪につないだ一本の赤い毛糸があった。

ひょいひょいと器用に指を動かすと、それは様々な形に変わって行く。

「蜉蝣様、か」

会いたいな、と。

おかしそうに、そう笑った。

◆◆◆

「……あたってしまった……サイテイだ……」

部屋を出た瞬間、片をうなだれ憂鬱な気分に陥ってしまったフリージア。気持ちの空振りが続きすぎて、何が空振りで何が当たっているのか分からなくなってきた今日この頃。

妹のことや国のことになると熱くなり、周りが見えなくなるきらいがある彼女。これが国を滅ぼしてしまうかもしれないということは、なんとなんかではなく、確信めいたものがあった。

「……もっと、淑やかになりたい」

強気な少女の、切なる願いだった。

けど、自分が強気で居なければ、きっと、この国はどこかの植民地にでもされてしまうだろう。

平和な時代に生まれ育った両親は、治世でこそその力を発揮する。

生まれたときから動乱の波に呑まれた私は、乱世でこそその力を発揮する。

この国には、不釣り合いな性格だとも自覚している。

だが、人間は割りあてられた配役を演じなければならない。

そう、フリージアは考えていた。

だから、きっとこの乱世を終わらせて見せる。目に見えない死の恐怖におびえることのない、平和ボケが出来るほど平和な世界に。

そして、それを成し遂げられたなら、席を譲ろう。

優しい、妹に。

そのためにも、この国を滅亡させはしないし、妹も死なせはしない。

――――そう。どんな手を使ってでも。

「フリージア様、お時間です」

「……気配を殺して声をかけないで欲しいわね。心臓に悪いわ、セルヴィ」

「申し訳ありません」

頭を目を伏せる程度下げるセルヴィを見ながら、ゆっくりと目を細めた。

「あなたにも、苦労をかけるわね」

「いえ――――俺も、この国が平和でいてもらいたいですから」

この近衛騎士団長にも、人生を二つに裂くような重荷を乗せている。『聖騎士』という重荷と、もうひとつ。

「……セルヴィ」

「はい」

「……ゴメン、ね」

「……はい」

第十二話：薄幸の第二王女とか（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十三話：とか、とか（前書き）

今回は六千文字程度です。
安定しないですね、はい……。

第十三話：とか、とか

「いつにもまして、いつにもましてるわね」

「はい。あの『最悪の魔女』の息子だともう伝わっているでしょうから。色香を漂わせて籠絡しようとする輩も出てくるでしょうし、少しでも関係を持てれば儲けものと考える輩も出てくるでしょう」

「……英雄色を好むって言葉、カゲロウにあてはまるかしら」

「ないでしょう」

「そうね。あの少女にも手を出していないみたいだし」

「……男色、という可能性がありますが」

「まさか、でしょう？」

「……ない、ですね」

「久しぶりにセルヴィの冗談が聞けたことだし、よしとしましょう」

「うっ……」

「フフ」

フリージアは体の線が少しわかるようなワインレッドのドレスを

着ている。少し派手過ぎ、と言われれば反論の余地がないようなドレスだ。扇情的、とも言えるだろう。たわわと実った二つの果実を強調するような、そんな作り。

本人に、このドレスの威力がどれほどなのかということは理解できていないようだが。

セルヴィは少し装飾を施した儀礼用の騎士甲冑を着こんでいる。儀礼用といっても侮ってはいけない。軽い、というその点を魔法的技術でさらに強調し、羽のような軽さと鋼の鎧と同等の防御力を有する優れモノだ。こういった乱雑な場所では役に立つ。

「それにしても、あの娘たちは、綺麗な子たちばっかりだったわね」

「それもそうでしょう。エルド商会は奴隷の質が高いことでも有名です。あの豚男にも、それをわきまえる意識ぐらいはあったのでしょう」

「そういえば、あのあとエルド商会の豚男はどうなったの？」

あのあと司法局に突き出したままの状態だったのだ。というより、まだ戻ってきて一日も経っていないのだが。

「罰金一〇白金貨がエルド商会に課せられました。豚男はエルド商会に身柄を引き渡され、その直後から消息は不明です」

一〇〇銅貨で一銀貨。
一〇〇銀貨で一金貨。
一〇〇〇金貨で一白金貨。
平民の年間所得水準が二金貨である。
それほど、奴隷を商業として認めるには、厳しい罰則が必要だと

いうことだった。

「……まあ、そんなものかしら」

「せめて、一白金貨ほどの値段になれば、その身を以って罪を晴らすことでも出来るでしょうが」

「物騒なことだけど……まあ、私だったら一金貨でも買うことは無いと思うわよ」

「では、魔法国家フレメアあたりの人体実験のサンプルにでも」

「それ以上は、言っちゃあだめよ」

「……すみません、口が滑りました」

「……それにしても、可愛いなあ」

二人がいるのは主催側――王族――がいる会場全体を見渡せる少しだけ高い場所。すでに王と王妃がにこやかに談笑している横で、彼女らは結構物騒なことを話しあっていた。

ここからでも、この親子があまり似ていないことが分かる。

彼女が見つめる先には二〇人程度の女性の集まりで、それぞれが楚々とした動作で談笑している。

それもそうだろう。

そこら辺のことは、既に『調教』されているに違いない。

だとしたら、いつもカゲロウにくっついている少女はどうなるのかといえば――恋する乙女は力強いということだけだ。

これから彼女らは、自由になる。
だが、『生き方』をしらない人もいるだろう。
とりあえず故郷に帰ることを望む人間もいれば、ここで暮らすことを望む人間もいるはずだ。彼女は、それを出来る限り叶えてあげたいと思っている。

「そういえば、カゲロウは？　主役がまだ来てないじゃないの」

「……そういえば、遅いですね。呼びに、言って来ましょうか？」

「まあ、いいわ。主役は遅れてやってくるものだと、昔から相場が決まっているわ」

「……英雄譚ですか。俺も、子供のころに読みました。今になって思えば、結構恥ずかしいことを言っているものだなと思うばかりです」

英雄譚とは、架空の世界を題材にしたファンタジー小説だ。英雄譚だけではかなりの数があるが、公知の英雄譚といえば一つだけである。
その主人公が数々の名言を残したとして、今でも語り継がれている。
紙自体が高価なものなので一部の貴族や上流階級のものだったが、それは口伝で伝わり、様々な人間の様々な脚色を受け、伝説となっている。
人々の間で語り継がれる主人公は勧善懲悪のスーパーヒーローだったが、原典は違った。
普通の少年が、守りたいものを命懸けで守る。悪だとか正義だと

かは、そんなものは考えず、自分の心に従って圧倒的な『敵』に立ち向かう。
そんな、夢物語だ。
「……それにしても、」
そう思ったところで、会場の一角でざわめきが起こった。
コツ、と。その足音はやけに会場に響き渡った。
ざわめきが起こっているはずなのに、さきほどまで知略知謀を張り巡らせていたはずなのに、誰もが最初にコンタクトを図ろうと準備していたはずなのに。
彼が一歩足を踏み出すだけで、道が出来た。
まるで英雄譚にある、魔王に一歩ずつ歩みよる主人公のように。
「ふふ。面白い人材だな。フリージア、よく連れてこれたものだ」
隣でその様子を微笑んで見つめる両親。それができるだけで、やはりこの二人は自分が足元にも及びつかないような『大物』であることが分かる。
しかし、その言葉には間違いがあった。
「いいえ、お父様。カゲロウ殿は、自ら選んだのですよ。――この、道を」

◆◆◆

な、何だ？
僕が歩くと人垣がどんどん別れていくのだけれど。なんだか青ざめたような視線をこちらに向けてくるのだけれど。

興味は無いけど、無感情ではないんだよ？
これでも、みなさんの所作に結構傷ついてるんですよ？
あからさまなイジメはいけないと思う。

……鬱だ、帰ろう。

「か、カゲロウさん？　どうしたの？」

「……これって、結構辛くない？　っていうか、トコも僕と同じこの状況に居て、よく平気だね。尊敬するよ（その図太さに）」

「今心の声が聞こえたんだよ。……カゲロウさんって、結構鈍感だったり」

「む。失敬な。これでもこのパーティー会場に潜む間諜の人数ぐらい分かる」

天井に三人。客人に紛れて四人。計七人。
客人に紛れるなら、もうちょっと自然な動作をとらないといけない。
天井裏に潜むなら、気配を殺し過ぎてもいけない。気配を消す、っていう行動は、そこに本来存在する気配さえ消してしまうんだか

ら、絶対的に違和感が生じる。

何事も、自然体が一番、っていう結論にたどりつくのだけれど。やっぱり、それらしい雰囲気を纏っていて欲しいと願う僕はおかしいのだろうか。誰でも、今さっきまで自然に話していた人間がナイフを振り回してくるのは恐いと思う。

「……そうじゃないんだけど、ほんとうに、帰っちゃうの？」

「嘘だよ。あそこでフリージアがこっちを見つめていらっしゃるから、行って差し上げよう。しゃあなしで」

「……カゲロウさん、結構不遜なんだ」

「嘘だよ。さあ、行こう。御姫様（トコサマ）」

これも、しゃあなしで手を差し伸べる。誰に、なんて野暮なことは言わないよ。

「……う、うん！」

◆◆◆

パーティーは王の、『楽しんでいってくれ』という言葉とともに

始まった。
それと同時に、固まっていた貴族諸氏がカゲロウの元へと詰め寄ったのは言うまでも無いことだ。
最初はまるでリンチにあっているかのように周りを囲まれ表面ばかりのお世辞（聞き飽きた）を並べられて辟易としていたところをセルヴィに救出されたのだった。

これで質問責めは終わり？　ちょろいね。と思った瞬間、セルヴィが、『並んで、お一人ずつどうぞ』と死刑宣告ともとれる言葉を吐いた。

「お美しい方なのですね。嫉妬してしまいそうですわ」

「いえいえ、そんなことありませんとも」

「まるで白雪のような肌。女として少し思うところがありますので」

「いえいえ、そんなことはないですとも。貴女も充分お美しいですよ」

「ところでお話があるのですが、どういった女性がお好み――」

「いいお話があるのですが――」

「ｗｒｔｙ金ｍｚｘｂｔ――」

最後の方は、雑音相手にどんな対応をとればよいのか分からなくなってしまった。
こういう腹黒いやりとりには自信があったカゲロウだったのだが、人間の欲望の渦はそれぐらいではどうにもならなかったらしい。

視界の端で、フリージアの体の横で人差し指を振るのが見えた。
次の人物は、重要だということらしい。この質問責めが始まる少し前にフリージアが決めた合図だった。

真面目に応対してくれ、という合図と取って貰って構わないだろう。

「宮廷騎士団長のボーヴ＝ゼレファンと申します」

「カゲロウ＝ヴィオーネです」

宮廷騎士団がこの国を守るのに対し、
近衛騎士団は王族を守る者たち。
ようするに、セルヴィと双極に立つ者だ。

灰色の髪を短髪にし、瞼から覗くのは意思の強そうな灰瞳。大柄なその姿は熊さえ連想させる、というわけではなく、英雄然としたその物腰は、人間でありながら底なしの雰囲気を持っている。
たしかに、その他大勢とは一線を画すようだ。

「このたびは、国の救援要請に応じていただき、誠に感謝いたします。何分永久中立国であるがゆえに、いろいろな恨みを買っている国ですので。これからは、よろしくお願いします」

「ん？　え、あ、はい。よろしくお願いします」

「では」

そう言うと一礼してどこかに行ってしまったボーヴ。

カゲロウには違和感があった。

まったくもって、他の貴族たちがしてきたようなことをしなかった。

というより、繋がりを求めようともしなかった？

「ああいう性格なんだ、あの男は。不器用で、誠実。ゆえに、この国のことを心配している」

セルヴィが困惑した表情のカゲロウに助け船を出すかのように声を発した。

あれが、この国の『騎士派』のトップ。

セルヴィの言葉から察するに、愚直なほどにこの国を愛してやまない愛国家。そのためなら、いくらでもその身を死地へと投げ出す。国益となるようならば、自らさえ捨てるような、そんな男。

ようするに、カゲロウが敵になれば、いくら仲よくしていようとあっさりと切り捨てるということだ。

「あの男は強い。俺が表立っているからあまり目立たないが、この国の危機を救ってきた、紛れもない英雄だ。宮廷騎士団には、そういった人間が集まっている」

「ようするに、心強い仲間、ってことでいいんだな？」

「……そうだな。しかし、心に留めておいた方がいいのは、あの男が守ると誓っているのはこの国であって、王族ではない。あり得ないと思うが、王族が愚鈍な決定を下した瞬間、反旗を翻すだろうさ」

そんな評価の男らしい。

そんな評価を得ることができるほどの男だということも分かった。

「――――『騎士』か」

騎士とは、どんな生き物だ？　と問われれば、あのボーヴという男は、きっと、こう答えるだろう。

守ると心に誓ったものを、守る生き物だ、と。

◆◆◆

「夜も更けてきたことだし、舞踏会に変えようか」

「え？」

いきなりそんなことを言い出した現王。それにハニカム形で承諾する王妃。

驚きの声を上げるカゲロウ。どうしたのかという表情で彼を見つめるフリージア。

社交ダンスぐらいは踊れる。そんなことが問題なのではない。

まだ、カゲロウの前に並ぶ列は最初の半分ほども残っているのだ。それを無碍にすれば反感が云々と駆け巡る。

「いいのよ。もう、こういう父上の突拍子もないことはみんな慣れているから」

「……、」

言葉も出なかった。

言葉も出ないぐらいに嬉しかったという意味だが。

だって、もう質問責めに遭うことが無いのだから……っ！！

「僕は、この、座り心地の良い、椅子で、うたた寝を、敢行、して、みる……っ！！」

「主役が踊らなくて誰が踊るのよ」

「えっと、貴族諸氏の皆様方」

「……、」

フリージアがすっと指をさした。その先には、元奴隷の女性たちの中に居ながら、そわそわとしている一人の少女がいた。

「こういうときは、男性から声をかけてあげないと」

「……嘘だ。あのトコが、自重している、だと……？」

「……女の子にもロマンがあるのよ。それを叶えてあげるかあげないかは、いつも男に委ねられるのだけれどね」

「……分かった分かったよ分かりました。こうなったら手取り足取りダンスを叩き込んでやるぜへっへっへ」

「無表情で言われても……」

「……行ってきます」

「行ってらっしゃい」

そうしてカゲロウは深々と座っていた椅子から、ゆっくりと腰を上げた。

歩きだした彼の背中を押すように、クラシカルな音楽が流れ始めていた。

◆◆◆

「あら、トコ？　今回は行かなくてもいいの？」

「……あんまりしつこすぎると、嫌われるって言ったのはお姉さんなんだよ」

「そうね。しつこすぎても嫌われちゃうけど、ぱっとやめちゃうのも、不自然かなー？　なんてお姉さんは思っていたりするんですよ？」

「……うぅ、分からないんだよ」

そういいながら定期的に『王子様』がいるであろう場所に視線をやるトコを微笑みながらみつめる女性。
数年間、彼女を妹のように世話し続けた女性だった。
今、その妹のようなトコが、初恋とやらをしている。
なので、絶賛応援中だ。幸い、トコよりかは人生経験が豊富なので、それなりのアドバイスが出来た。
ちょっとやり過ぎたかな、と思い今はあまり言わないようにしているが。

「あれ？」

「どうしたの？　トコ」

「い、いや、べつになんでもないんだよ」

「？」

彼女が今さっきまで見ていた場所に視線を送ると、そこにあの少年の姿は無かった。
なるほど、がっかりしているわけか。

小柄な少女には分からないだろうが、女性としては結構高身長である自分には見えた。

「ふふ。若いって、いいわね～」

「？」

こちらへとゆっくり近づいてくる、黒髪の少年が。

◆◆◆

「……トコ」

「ふぇ？　ふあ！？」

突然目の前に現れたカゲロウに可愛らしい悲鳴を上げながら飛びあがったトコ。

「……、」

「？」

そんな少女に向けて、ゆっくりと白魚のような手を伸ばしたカゲロウ。

何を表す動作なのか分からない。

「　　、　　」

とある少年が、ゆっくりと言葉を発した。

それは、とある少女を喜ばせるのに十分な言葉だった。

「　　」

だから、少女も、喜びを隠さずに、その手を取った。
少年の手の中は、とても温かかったという。

◆◆◆

「――――疲れた」
「お疲れ様なんだよ」

数々の質問責めをもらっていた。
その中にトコをいぶかしむような視線を向けた者もいたが、それは仕方がないだろう。
選民意識は、普通に存在するのだ。元奴隷、というだけで、いや、もしかしたら平民だとしても、貴族からしてみれば穢れたように見えるのかもしれない。
仕方がないことだ。
そうやって、割り切った。

割り切ったのだから、もうどうでもいい過去のことだ。彼は、そういった技能に長けている。
人間の汚い部分をよく知っている彼だが、同時に人間の素晴らしい部分も知っている。

一部分だけを見て評価することがどれだけ愚かなのかということも、よく知っている。

「カゲロウさん。その、ダンス教えてくれてありがとう」

「ん、喜んでもらえてなによりだー」

「……棒読みなんだよ」

「ぐっへっへー。……疲れた」

ベッドに顔を埋もれさせた。

体がふかふかのベッドに溶けていくかのようにさえ感じる。直後から、先程以上の疲れが溢れだし、眠気が彼を襲った。

「風邪ひいちゃうんだよー」

「ん……」

カゲロウはそのまま芋虫のようにベッドの上を這うと、ぼんやりとした表情のまま布団を被り、そのまま目を閉じた。

寝付きはいい方だと自負している。

木の上でも熟睡できるのだから、こんなふかふかでべりーごーじゃすな布団の中だとそれはさらに早かった。

目を閉じて三〇秒。

彼の意識は闇に落ちる。

そして残された少女は、

「あれ？　ボク、今からあそこに自分からダイブしなくちゃいけなかったり？　え、……え、……え？」

嬉しいのやら悲しいのやら。

その夜、彼女はベッドに潜り込むかどうかを一時間ほど悩んだという。

第十三話：とか、とか（後書き）

次の日、抱き枕状態にされたトコが顔を真っ赤にしている姿がフアによって発見されましたとさ。

めでたしめでたし。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

幕間：『王』と『王妃』だけ（前書き）

閑話ですね。
ようするに、主人公が出ません。

幕間：『王』と『王妃』だけ

夜も更けたとある一室で、一組の男女が隣同士で座って何か感慨深げに会話をしている。
聞く人が聞けば驚く、そんなお話を。

「フレア。俺たちの娘は、この乱世に必死に抗っているよな」

そう呟く現王。

「……そうですね。わたくしたちは、あの娘には、足枷にしかならないでしょう」

そう呟く王妃。

「……なあ、フレア」

「なんでしょう？　フリード様」

「……俺も、久々に滾って来たぞ？」

柔和な笑みの奥に、獰猛な笑みが浮かんだ。彼を知る人が見れば、誰もがこう言うだろう。『あなたは、誰だ？』と。

「まあ。あまり、粗相のないように」

「はは。もう三〇にもなるのにな、親父の跡を継いでから、なかなかに窮屈だ」

わざとらしく肩を叩きながらため息をつく。

そんな彼を見て口元に手を当てながら控え目に笑うフレア王妃。

「現役を退くからですよ。――どこかの英雄さん」

その言葉は、ゆっくりと過去を掘り起こす、そんな言葉だった。

しかし、彼の性格上、感慨に耽るなどという行為はあまり好まないのか、愉快そうに笑い飛ばした。

「はっはっは。まあ、フリージアを驚かすのも、いいかもしれんな」

「ま。あなたったら、やんちゃですわよ？」

そんなことを言いながらも、驚く娘の姿を目の裏に思い浮かべているのか、こちらも愉快そうに笑う。

そんな団欒もつかの間。

尻すぼみのように笑い声を抑えて行くと、途端に空気を変えた。

「――お忍びで、アルタイルにでも行くかな」

アルタイル。アルタイル皇国。三列強の中でも『武』に秀でた国。

「戦争に行くつもりですか？」

「違うぞ。あそこには俺の旧友がいるから、なんとか『話』が通りそうなんだよ」

『話』。国家首脳同士がする『話』といえば、一つしかないだろう。
そこに、知略知謀を張り巡らせた心理戦などないだろう。そんな小細工など、お互いに通じないのは分かっている。

「ふふ、ニゼル皇帝ですね？」

「――なんでもお見通しだな、お前は」

愛する妻を目を細めながら見るフリード。
そんな彼にはお構いなしと言った様子で、どんどん昔のことを掘り返していくフレア。その表情は柔和、というより嬉々とした笑顔で満ちている。

「冒険者の時に、よくお二人が喧嘩をしていらしたのを見ていましたから」

「む。名前と人相は変えていたのだが」

どこかおかしいとこあったかなあ？　などと真剣に悩んでいると、フレアが、

「雰囲気はまるで、ですわよ」

と痛いところを突いてきた。
人間、見た目よりも雰囲気で分かる、とはこのことか。よく知らないところで自分を見られていたと思うと、若干ながら恥ずかしく思うフリード。
だが、そんなことよりも、素直に妻のことを称賛した。

「はっはっは。やはり、唯者ではない、という奴だなフレアは」
「何をおっしゃいますの？　こんな普通な元冒険者をお捕まえになって」
「普通の冒険者が、俺とニゼルが喧嘩している場所に来れるものか」
「まあ。それは失念していました」
三〇代の女性がするには無理がありそうな舌ペロっを難なくやってのけたフレア。様になっているのだからこれまた凄い。
やれやれ、と二人で首を横に振る。
「『炎姫』ともあろう方が、まったくだ」
「『英雄』ともあろう方が、まったくですわね」
それから数秒間、見つめあった。
その視線は何かの合図だったのかもしれないし、何の意味も無かったものなのかもしれない。
ただ、二人はゆっくりと唇を重ねた。
一瞬が、永遠にも感じられる、そんな幸福な時間。そんな時間も、ゆっくりと終わりを迎えた。
唇を離し、それでもなお顔を近づけたまま、フレアは叶わないと分かっていながらも、こんなことを言った。
「フリード様。――わたくしも、ご一緒しましょう」
「それは、ダメだろう。俺たち二人のどちらかが残っていなければ、

必ずぼろが出る。娘やセルヴィなんかは当たり前として、あのカゲロウという少年も、だ」

幸いなことは、あの少年が対人関係に慣れていない、というより、あまり人を知らない、知らなさすぎるということだろうか。

それぐらいの難点があったほうが、子供なのだから面白い。なにごとも、完全無欠より楽しくないことは無い。

「だったら、フリード様がお残りになってくださいな」

「それだと、本末転倒ではないか？」

「あら、うっかり」

あらまあ、と口元に手を当てながら、やはり叶わなかったかと心の中で思いながら、それでもなお、笑みは絶やさなかった。

「――まあ、心配しなくても大丈夫だ。なんせ、『俺』、だからな」

『俺』の部分を強調するような口調。

ようするに、彼の言いたいことは――『俺』を信じろ、と。そう言いたいわけなのだ。

「本当、猫を被るのがお上手な方です」

そんな王の公知に見せる姿とのギャップをおかしく思いながら、そういえば自分もか、と考えると一層おかしくなってくる。

「まあ、獅子も猫の一種なのだがな」

「じゃあ、人の皮を被った化物、と？」
「違うな。どちらかというと、化けの皮を被った、化物だ」
「ふふ。それでは、どこまでも、『化物』ではありませんか」
「はっはっはっは。違うさ、『俺』だ」
そんな軽い冗談を交わしながら、微笑み合う二人。
そんな二人は、王と、王妃。
「ならば――わたくしは、貴方の帰ってくるべき場所（しろ）を、お守りいたしますわ」
「ならば――俺は、みんなが住んでいる国（いえ）を、守るとしよう」
『王妃』は、言った。
『家族』を、守るために。
『王』は、起った。
『国（すべて）』を、守るために。

幕間：『王』と『王妃』だけ（後書き）

そう言えば皆さん、小説を書くときはどんな感じですか？
僕はニコ動を見たり、音楽を聴いたりしながら、楽しくやってます。
やっぱり、楽しくやらないと、ですよね。
後書きまで閑話になってしまった件ｗｗ

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十四話：黒猫様、とか（前書き）

おととい遅れます報告をして、二日後に投稿とか……。
こんな作者ですが、今後ともよろしくお願いします。

第十四話：黒猫様、とか

にゃあ、と。

「黒猫？」

カゲロウは、戦争を終わらせるためにアイゼンハート王国にやってきた。ある条件が整った戦場であれば、無敵になる曲弦師を携えて。

だがしかし、戦争が起きなければ、悪く言ってしまえば無用の長物である。

なので、ここ数日は暇な日が続いていた。

そんなある日のこと。トコも自分の部屋に戻ってしまった。……正直、暇なのが、更に暇になったというか。いなければいないで寂しいというか……。

なので、街へと繰り出したわけだ。給金は結構もらっているので、一日ぐらい遊び呆けても、まったく苦にならない。しかし、遊び方を知らないので（いい年して子供と鬼ごっこは寂しい）、オープンカフェのようなところで朝から昼まで本を読んでボーっとしていた。

昼時に、パックン（サンドイッチであるが、この世界にサンドイッチ伯爵はいない）を頼んだら、

にゃあ、と。

冒頭に戻るわけである。

「……ふにゃあ」

「……くれ、というわけか？」

黒猫が首を縦に振るので（それだけでも驚きだが）、パックンのはしをちぎって彼か彼女の口に近づける。

すると、にゃん♪　と嬉しそうな鳴き声をあげて、喰らいついた。

もちろん、カゲロウの指ごと、である。

「っつう」

反射的に指を引くと、さっきまではしゃいでいた黒猫が申し訳なさそうにこちらの様子を窺っていた。

（……昔、誰かに飼われてたのかな？）

ここまで人の機嫌を窺える動物は滅多にいないだろう。いたらいたでおどろおどろしいが、この黒猫はなにか愛玩を誘うモノがある。

そう。例えるなら、トコや、デラリオラビットのような、小動物臭を漂わせているような……そのまんま小動物だった。

「にゃー」

「……に、……まだ、欲しいのかな？」

思わず猫言葉で語り返そうとしたカゲロウだったが、人間の英知

である『言葉』を捨てるのに抵抗があったのか、寸でのところで思いとどまったらしい。

そんなカゲロウの『言葉』に、黒猫はまるで全てを理解しているかのように頷く。

カゲロウは同じ轍を踏まないように、そっとパックンを地面に置いて、自分の分をもう一度頼んだ。

もしゃもしゃ、と。そんなほのぼのとした音だけが、その場に残る。

「……にゃおん」

「どうしたの？　まだ、いるのか？」

パックンをぺろりと平らげた一人と一匹。

カゲロウがそんなことを黒猫に問いかけると、今度は首を横に振った。本当に、利口な猫である。

今度は何をするつもりかと見ていると、気軽い調子で机の上に飛び上がってきて、そのままの勢いでもう一度ジャンプし、カゲロウの頭の上に着地した。

そこで、一鳴き。

「にゃおぉん」

「……なるほど。お猫様気分、というわけかい」

「にゃん」

そうかい、とカゲロウは呟くと、店員にコーヒーとミルクを頼み、本を開く。朝からこの調子なのだが、定期的に注文をしているので煙たがられない。

届いたミルクを器に移してもらい、地面に置く。

好きな時に飲んでいいよ、ということなのだろう。黒猫もそのことが分かっているのか、にょん、と鳴くとぽかぽかと照りつける陽気に任せて、目を閉じてしまう。

それを確認すると、カゲロウはコーヒー片手に本を開いた。もちろん、黒猫を頭の上に乗せたままである。

「……強さとは、弱さ、か。なんだか、深いのやら、浅いのやら」

本に書いてあることを復唱したりしながら、地道に読んでいく。先が気になるような、気にならないような。そんな本だ。もう少し面白ければ時を忘れて読みふけることが出来るのに、もう少し面白くなければ投げ捨てることが出来るのに。

ついつい、『次のページまで』と思ってしまう。

そんなこんなで、もう半分ぐらいは読んでしまっているのだが。

そんなこんなの――そんなこんなで、辺りは少しだけオレンジ色に染まっていた。

いつのまにかミルクがなくなっている。黒猫はいまだに頭の上にいる。

驚異の早業である。

「さて、と」

「にょおん？」

不思議そうな鳴き声を上げる黒猫に対し、

「ん、そろそろ帰ろうかと思ってね」

と、もはや何の違和感も無しに会話をする。

人間→猫はまだ可能性としてあるのだが、猫→人間の構図はどう考えてもおかしい。そんな魔法を使っていれば話は別なのだが、事前現象が一度も起こっていないところを見るにそんなことでもないのだろう。

「にゃん」

「いたた。爪立ててしがみつかないで。いたいから、すごくいたいから」

「にゃにゃ」

「へっくし。ちょっと、尻尾で鼻をくすぐるのは反則へっくし」

「にゃおーん」

「ぶわっ。前、前が見えない。前が見えないよ、見えませんよー？」

どうやら、離れたくないようである。

つくづく、珍しい猫だと、そう思う。

人間に慣れた猫でも、初対面の相手に対しては逃げの体勢をとるのに、野良猫（首輪が無いので）のこの猫が、ここまで人に慣れて

いるとおっかなびっくり、珍し過ぎる。

「どうしたの、ついてきたいのか？」

「にゃん！」

そうらしい。

そうらしいの、そう、が一般人には分からないのだが、二人には時間では測れない何かが築かれているようだった。

『ついていく』、と取っていいのだろう。

「……城って、動物持ち込み禁止だったっけ？」

そして、連れて行く気まんまんのカゲロウの姿があった。

その後、カゲロウと頭に乗った黒猫を見て、侍女たちがきゃーきゃー言っているのが目撃されたらしい。

どっちに対してなのか、あるいはセットでの威力なのか、それは本人たちにしか分からないのだった。

「にょん」

「に、……ただいま」

そんなカゲロウの頭の上で、黒猫の、紫色の瞳が夕焼けに反射してキラキラと光っていた。

今日も一日、平和で終わるかな？　なんてことを思っていると、

甲高い金属音――王都の入り口に設置された警鐘からの音が、街中に響き渡り、次の瞬間、空中に魔法陣が展開され声が響き渡った。

『魔物の大軍が進攻してきました！！　騎士団および防衛戦力は、ただちに展開を！！』

警鐘の音、魔法陣からの声――そして、魔物の雄たけびが夜に沈みだした王都に、反響した。

第十四話：黒猫様、とか（後書き）

ｗｋｔｋ
防衛戦ですよ、防衛戦。
カゲロウくんの条件付きチートをフル活用できる時がやってまいりました。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十五話：防衛戦とか　（1）（前書き）

一応二千文字以上はありますが……作者は小出しにするのが好きなようです。
では、どうぞ。

第十五話：防衛戦とか　（1）

「うわ。デラリオドラゴンもいる。どうすんのこれ？」

「迎え撃つ、というしかないだろう？」

カゲロウは大きな門の上でセルヴィと街道のほうを眺めていた。どっかんどっかん、と、まるでシリアスの欠片も無い爆音を上げ、森を紙吹雪の様に吹き飛ばしながら突き進んでくる影があった。それは、群体なのかもしれない。否、個体が集まっているだけの群集なのだろうか。

およそ、一〇〇〇体ほどの魔物の大軍が、デラリオ森林の方から流れ込んできている。

「絶望的、なんて言葉は、吐かない。だが、俺一人ではどうすることもできない」

「じゃあさ、王国騎士団の騎士団長にも応援を」

「出している。そして、もうすぐ来るだろう。だけど、それでも足りない」

セルヴィはそこらの木よりも高いデラリオドラゴンが、猛り狂って木々を吹き飛ばしながら暴れ回っているをの指差す。

「あれを、どうしろと？」

「ようするに、アレ以外はどうにかなる、ってとこ？」

カゲロウは意外な返し方をしてきた。

もちろん、他にもデラリオマッシュルームや凶暴な魔物の数々が押し寄せてきているだろうが、あの存在が一番厄介であることに変わりはない。

分厚い鱗や皮、甲殻が全てを防いでしまうだろう。

防御力が圧倒的すぎるのだ。大地を踏みしめるその重厚な筋肉の塊は、生半可な攻撃では破くことはできない。

「じゃあ、僕がデラリオドラゴンだね。久々に遊んでくるよ」

「な！？　ちょっと待て」

「なんですかなセルヴィ殿」

セルヴィは早速飛んで行こうとしたカゲロウの腕を、グァッシィ！　と掴むと、焦ったように叫び出した。

「死ぬつもりなのか？　馬鹿なのか？　あほなのか？　今現在その恐ろしさを回想していたところだろうが！？」

「そうは言っても……どうすんの？　他の人間じゃ無理。ならば僕。こうなるのは必至だね」

「……むぅ」

カゲロウは有り体に言えば、兵器としてこの国にやってきた。ど

こぞの国が各国に抑止をかけるための戦略兵器として。
それの力を、ただ、少しだけ解放するというだけなのだ。
たかが兵器。
いなくなろうが構わないはずなのだ。
だが、セルヴィはカゲロウの黒い黒い瞳に向けて、こう言った。
「死ぬなよ」
それは、読み仮名をこうふってもいいということだろうか？
『任せた』。
「任された」
少しだけ気が抜けた調子でそんなことを口走ると、城門の端にある矢塔に糸をかけ、パチンコの要領でデラリオドラゴンが暴れているところへと飛んでいった。
セルヴィは、ただ、その後ろ姿を見送る。
そして行うのは、戦の準備。

◆◆◆

デラリオドラゴン、ウォーム大陸南側に群生するデラリオ森林に生息する、竜種の中の地竜種（グランドドラゴン）。その階級は中位とランク付けされて

いるが、その突破力は上位の竜種にすら負けていない。
城壁崩し（ランパートダウナー）。デラリオドラゴンの突進は、その異名をとるに相応しい。

「そう言えば僕、デラリオドラゴンに勝ったことが無いっていう……」

「ゴォアアアアアアアアアアッ！！」

目の前で暴れるデラリオドラゴン。
その四つの足で地面を踏み鳴らすたびに大地が揺れ、その咆哮は天をも揺るがす。
その強靭な肉体から繰り出される突進を、カゲロウは受け止めたことがある。ただ正面から、何の小細工も無しに。

彼の頭の上では、黒猫が呑気そうに欠伸をしている。どうやら野性としての本能が大分欠如しているらしい。

そんなことを思いながらも、カゲロウは糸を張り巡らせた。
今まで勝ったことが無い、とは言ったが、負けたことも、無い。

「……よーい、」

彼は右の人差し指に糸を引っ掛けると、思いっきり引っ張る。
そして、

「どんッ！」

それを弾くと同時に、森の一角が捲れあがり、デラリオドラゴンへと降り注ぐ。その光景をデラリオドラゴンはどうでもいいと言っ

た様子で眺め、一声鳴くと、強靭な尾を音速に迫る勢いで振り回し、降り注いできた瓦礫を吹き飛ばす。

これはどちらにとっても様子見。

カゲロウは流れるように指を動かすと、空中へと吹き飛んでいた瓦礫、岩や巨木に『糸』が通る。

それが導く軌道は、当たり前のようにデラリオドラゴンの元へ。

瞬間。『曲弦師』の力も加えて、宙を舞っていた瓦礫の多くが、流星のごとく彼の者の身体に降り注ぐ。

これだけで、すでに地形を変えながらの戦い。

これだけやっても、まだ、様子見。

デラリオドラゴンは、その一切の攻撃を寄せ付けぬ強靭な体を以ってして、降り注ぐ瓦礫を今度は粉微塵へと吹き飛ばす。

「面倒臭いな、やっぱ」

大魔法クラスの魔法でないと、やはり簡単には決着がつかない。

キーナのような人外であれば、やはり簡単に仕留めてしまえる怪物だが、いくら強いといっても、まだ経験不足もあってか思うように戦えないカゲロウだと、かなり手間取る。

そんな思考をしている内に、今度はあちらからの攻撃があった。

ゴボォ！　と地面を不自然に陥没させ、足を踏みしめ、突進の構えを取る。その一撃は、恐らくあの巨大な城門でも、紙屑のように突き破るに違いない。

しかし、だからと言って、真正直に真正面から受け止めるには分が悪過ぎる。

修行の時ではないのだ。これは、生死をかけた防衛。下手を打てば、カゲロウだけではなく、トコや、見知った顔ぶれも、全員死ぬ。

「――させるか」

低い声で、そう呟く。

らしくない感情だと思う。この、守りたいとかいう感情は、本当に、らしくないと思う。

だからこそ、彼は、真正面から受け止める。

空気がはち切れんばかりに焼けつくような殺気の中、カゲロウは堂々とデラリオドラゴンの前で仁王立ちをした。

「――来いよ、手品を見せてやる」

ドパンッ！　と。地面を大きく抉りとりながら、デラリオドラゴンは城壁をも突き破るその一撃を、ただ一人の人間に向けて放つ。手加減など、無用。獅子は全力で兎を狩る

だが、デラリオドラゴンの身体は、止まるどころか、後ろに吹き飛ばされた。ゴムボールのように数十メートル単位の巨体が、森を吹き飛ばしながらバウンドしていく。

「この世界には、力がたっぷりある。僕がお前を飛ばす力を出す必要はない」

そう。力の受け流し、という奴だろう。

自分であの巨体を吹き飛ばす力が無いのなら、その巨体の生み出した力を、そのまま相手に受け流す。

物体Ａから生み出された運動量を、『極限糸』のしなやかなで強

靭な性質を利用して、そのまま相手に受け流す。
受け返された方は、行き場を失った自分のエネルギーが身体の中で暴れ回り、得体のしれない苦痛が苛む。
「はは。結構いけるモンだね、これ」
そして、人は、『可能性』を手に入れたとき――――強くなる。
「行くぞ？」
格好つけも、味気も無い、そんな言葉。
そんな言葉とともに、漸く――――戦いが始まる。

第十五話：防衛戦とか　（1）（後書き）

見てくれよおやっさん。こんなにも、スローペースなんだぜ？
……なんで、もっと、早く、話しが、進まないんだ……。
なんで……まだ、戦争にすら入ってないんだー（棒）

内容が薄っぺらいくせに……進行速度だけは、亀のように遅い。
Σ（゜д゜）ハッ！？　これって……見限られるパターｎ

……ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十六話：防衛戦とか　（2）

大木のような剛腕が、空気を食い破りながら小さな人間へと振り下ろされる。
小さな人間など、紙屑のように引き裂くと思われるそれは、ほんの数センチ手前で急速に速度を失くし、そして弾き返した。跳ね返した。

独楽のように回転したかと思うと、そのまま数十メートルも後ろに押し返されたデラリオドラゴン。
その黄色い瞳が捉えるのは、やはり、小さな人間の――完全なる無表情だった。

ぞわり、と殺気を感じ取った時には、周囲の木々から鋭い何かがデラリオドラゴンの体に襲いかかった。だが、それらのほとんどはただ無残に弾かれるだけで、ほんの幾筋かの傷を巨大な体に刻むだけだった。

しかし。
その幾筋かの傷を狙うように、またも鋭い何かの攻撃が体を打ちすえていく。
そしてまた、幾筋かの傷が体に奔った。

そこでやっと、その攻撃が小さな人間によるものだと理解したデラリオドラゴン。山のような巨体を固めながら、ほんの数十メートル先に佇む小さな人間を睨みつけた。

「ゴォオォオォオォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

そして、天を突き破らんばかりの咆哮を上げると、地面をめくり上げながらの突進。

城壁を突き破るとされる、ただの突進。

そして、人間は――動かない。

今度は、体の上部が後ろに押しやられ、下部はそのまま前に進んだため、仰向きになるような形になったデラリオドラゴン。

一瞬の浮遊。

そして、行き場を失ったエネルギーが体を駆け巡り、痛みが体力を蝕んだ。

浮遊が終わる前に、さらに体を上に押し上げられる、というより、打ち上げられるような凄まじい力が、下方向から来る。

瞬間。そのエネルギーがベクトルが下方向に転換され、さらに激痛が、体を、精神を蝕んでいく。

膨大な土砂を巻き上げながら地面へと落下――叩きつけられたデラリオドラゴンは、前を見る。

そこには、やはり変わらず――無表情な、小さな人間が佇んでいるのだった。

◆◆◆

どんな生物にも、体力というモノがある。精神力というモノがある。

本人がそれを自覚しなくとも、それはやはり存在し、限界を迎えると、自然と崩壊を迎える。

それは、巨大な生物には特に顕著で、そのエネルギーを賄うために多量の栄養を必要とする。

存在するだけで膨大なエネルギーを消費しているのなら、それを促すだけで、最終的には勝てる。攻撃がダメージを与えられなくとも、そのエネルギーの消費を促すだけで、勝てるのだ。

首を刈りとる必要などなく。

派手な一撃も必要などなく。

ただただ、攻撃の積み重ねこそが、勝利へとつながるのならば――少年は、迷いなくそれを選ぶ。

指を弾くだけでそれが出来るなら、糸を操るだけでそれが出来るのなら、迷いなく、それを選ぶのだ。

目の前で無残に転ぶデラリオドラゴンを見つめながら、少年の表情は一向に変化しない。

ただただ作業的に、なんの面白みも感じることなく、相手を追い詰めていく。さながら、兵器のように。

そして、もう一度指を弾こうと、糸を弾こうとしたとき――口か

らぬめり気のある、どろどろとした赤黒い液体が零れだした。
何事にも、ノーリスクなど絶対にありはしない。
指を弾くたびに、あの巨体を弾き飛ばすたびに、少年の身体は破損していく。
その体積差。体重差。体格差。
いくら糸が強靭だといっても、いくらデラリオドラゴンの力を利用しているとはいっても――それら全ては、少年の体を経由している。
指の先から、ここら一体に広がる全ての糸は、少年に繋がっている。
だから、それを利用した力も――また、少年の体を突き抜けていく。
「分かっては、いるんだけどなぁ」
無茶なことぐらい、わかっていた。
それが、少しでも失敗すれば、この体は砕け散ることであろうことも、わかってはいた。
それでも、諦めきれないから。
カゲロウの後ろには、なんだかんだ言って、興味がないとか言っておきながら、興味深いなにかしらが、多く存在している。
「にゃあ」
頭の上で鳴く黒猫にだって、愛着が湧いた。

理解するのが、怖かったから――興味を持ちたく、なかった。
ようするに、自分は臆病なだけだったのだ……そのことに少年が気付いたのは、つい最近。

友達と喧嘩して絶交するのが辛いように、失恋が辛いように、憎しみが怖いように、復讐が怖いように。

何かを得れば、何かを失う。

それが自分を成長させた――なんて、軽々しいことは、拷問されても言えない。

失った悲しみを、知っているから。
それが、捨てられれば楽だということも分かっているのに――それを捨てられない苦しみも知っているから。

――――だから。なんて、そんなことは言わない。

カゲロウは、無表情のまま指を弾く。
デラリオドラゴンの巨体が突進していたのを、そのまま横に吹き飛ばす。

そして、自らの身体にもまた、横に薙ぐような痛みが襲いかかって来た。
今度は堪え切れず、腹と口を押さえながら、血を噴き出した。

気を抜けば、すぐに砕け散る、どころではない。

気を抜かずとも、このままでは、すぐに砕け散る。

――――それが、どうした。

「興味なんて、ないんだよ」

そう呟いて、カゲロウは、またも指を弾く。

それが、命を削ると知っていながら。

◆◆◆

「吹き散らせ。『乱風（エアロブラスト）』」

詠唱とともに、旋風状の風が、デラリオマッシュルームの触手を吹き飛ばす。

奇っ怪な叫び声がする中心地点へと、わずかに開けた触手の間をすり抜けて、突貫していく。

真っ赤な短髪を風に揺らしながら、そうするのは――近衛騎士団長、セルヴィ。

中央部にあ、本体である茸部分に到達すると、とにかく斬り伏せた。それだけで、末端に至る全ての部分が痙攣し、動かなくなった。

「く、そ」

だが、その後ろに見えるのは二体のデラリオマッシュルーム。
うねうねと蠢く触手が騎士団の人間を翻弄している。

そのとき、一つの重厚な鎧が、デラリオマッシュルームを一刀のもとに破断した。

ボーヴ＝ゼレファン。宮廷騎士団長。

「心強い仲間、か」

そのはずなのに、魔物を切り捨てていくその後ろ姿には、やはり、信用が置けなかった。
だが、そんなことばかりも、言ってはいられない。
信用できないならば、利用するまで。

「……いくか」

セルヴィは、誰に言うでもなく、魔物の群れに突貫していった。

◆◆◆

ぱきんっ、と乾いた音を立てて、デラリオドラゴンの肋骨三本と、カゲロウの右腕の骨が折れた。
デラリオドラゴンは吼え、血を吐き。
カゲロウは腕を押さえて、呻き声を漏らした。

腕一本で、肋骨三本。
随分と、安い買い物だった。

「っは、っは！　まだ、いけるかな？」

休む暇など与えない。
疾風怒濤、一気呵成、折れた腕が使えないのならば、健全な足を使えばいいだけのこと。
幸いなのかどうかは分からないが、マトは大きかった。正確な狙いなど、今更つける必要などないのだから。

糸を足につなぎ、思いっきり空を蹴りあげる。
地面ごとデラリオドラゴンの身体をかき混ぜる。大量の土砂と木が空へと持ち上げられ、めりめりと大地と木がかき混ぜられる。その中で、竜巻の中にいるかのように、デラリオドラゴンの身体は回転する。

――――まだだ。

「ッッ！！」

振り上げた足を強引に引き戻し、左腕を引き裂くように振るった。
糸が連続して弾かれ、勢いを増し、音速を超えたあたりで大爆発を起こした。

ソニックブーム。物質が音速を超えると、稀に生じる衝撃波。
空気の壁を強引に突き破ったエネルギーのベクトルが、そのまま、デラリオドラゴンの身体を打ちすえた。

かき混ぜられている土砂の中に、紅い液体がぽつぽつと混ざりはじめる。

――――まだだ。

かき混ぜられていた土砂がやっと止まると、そこにはボロボロな姿をしたデラリオドラゴンが鎮座していた。
だが、まだ戦意は失っていないらしく、ごうごうと息を吐きだしていた。

しかし、両者とも、疲労は極限。
両者の糸は、今にも切れそうなほど、緊張していた。

先に動いたのは――――――デラリオドラゴン。
もう、弾き返されるだとかは考えていないのか、四本の足を地面に喰い込ませ、めり込ませ、体中の筋肉を膨張させ――地面を爆発させて、突進を開始した。

一歩一歩が、地面を踏み散らす。

その一撃をカゲロウは――――――同じように、弾き返す！

ズゥンッ！！　と、二つの力が、相克し合う。

弾け飛びそうになる体を必死に前へ前へ。
こちらへ来そうになる山の如きものを、後ろへ後ろへ。

そして――――糸が切れたかのように、倒れ伏せた。

両者、全くの同時。

地響きを鳴らしながら派手に倒れたデラリオドラゴン。
ただ、ほんの少しの砂埃を舞わせて倒れた、小さな少年。

両者の違いといえば――その後に、誰かが助けてくれるか、くれないかの違いだった。

第十六話：防衛戦とか　（2）（後書き）

戦闘描写がやばい。薄い。

どうしよう、戦闘なのにほとんど心理描写ってどういう了見なんだろう僕は。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0007x/

え？異世界？……あぁ、そう。興味無いね（仮）

2011年11月21日22時12分発行